

東山南（A）遺跡

HIGASHIYAMAMINAMI (A) SITE

1993. 3

山梨県教育委員会

東山南（A）遺跡

HIGASHIYAMAMINAMI (A) SITE

1993. 3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、1979、80、81年度に実施いたしました甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園整備事業に伴う発掘調査の内、1981（昭和56）年度における東山南（A）遺跡の調査結果をまとめたものであります。

1979年度より行いました調査では、本県における最大規模の上の平方形周溝墓群の発見がありまして本遺跡の周辺も一躍脚光を浴び、今回の調査の初期では上の平遺跡の範囲確認が主目的のような感がありました。しかし、調査が進行するにつれ、遺跡は甲府盆地が一望できる景観の良い、東山山頂の三角点を中心に長さ、幅共に100m前後の範囲の中に集中する墓域群であることが判明いたしました。

検出されました造構の総数は11基で、その内容は弥生終末の方形周溝墓2基、古墳時代の円（方）形周溝墓9基であります。

弥生時代の方形周溝墓につきましては、本遺跡が上の平遺跡と隣接しておりますが、その間には170mの空白部が存在することにより、二つの理解が可能なことを示唆しております。すなわち、第一は、本方形周溝墓が淘汰された単独なもの、第二は上の平遺跡の延長上に位置付けられるとするものであります。

古墳時代では、8基の円形周溝墓と1基の方形周溝墓が確認されました。このうち第4号方形周溝墓では、周溝内より、一括集中して、高壙や塚とともに本遺跡の年代決定のきめてとなりました、陶邑産の把手付塚などが出土しております。また一括集中区の反対側の溝からは直刀が検出されました。

遺跡の周辺では首長墓の系譜を引くと考えられる小平沢古墳、銚子塚古墳、丸山塚古墳、茶塚古墳などが連続と築造されております。とくにこれらの古墳群の中では、時間的に近い5世紀後半に位置付けられている茶塚古墳との関連が注目されております。

茶塚古墳は古墳規模が縮小しておりますが、優秀な武器、武具、馬具を副葬品として持つことより畿内色の強い影響下にその存在を考えることが可能であります。本遺跡の円（方）形周溝墓群は、副葬品の一部が畿内からもたらされたものも存在しますが、小規模な低壙丘であり、一般の古墳と比較して見た場合、極端に貧弱であり茶塚古墳の被葬者の周辺にかかる集団墓としての可能性が高く、茶塚古墳を頂点とした重層社会が示唆されるところであります。このように本遺跡の発見は5世紀後半の古墳時代社会を考えるうえで、重要な資料になりうるものと考えております。

こうした調査の結果は、学校教育、学術研究に資するとともに、郷土の歴史を知るうえでも貴重な記録となることを念じております。

なお、本報告書が刊行されるまでは多くの方々からご支援、ご協力を賜りました。関係機関各位、並びに直接調査に当られた皆様方に、末筆ながら改めて厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

- 1 本書は、山梨県甲斐風土記の丘、曾根丘陵公園建設にともなう、東八代郡中道町東山南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、山梨県教育委員会文化課が調査主体となって実施した。
- 3 発掘調査は、昭和56年5月1日から11月30日にわたって実施し、調査現場は、小林広和、中山誠二、里村晃一が担当した。
- 4 写真撮影は、里村晃一（現場、遺構関係）、清水守（遺物関係）が担当した。
- 5 本報告書にかかわる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 6 出土品の整理には以下の者が従事した。
河上幸二、内藤章、犬塚一芳、山之内龍雄、富田政美、山本裕子、望月裕子、小林智夫、石原和人、内藤和久、辻村明宣、鈴木良弥、中西浩、川住みち子、飯沼美佐江、保坂岳志、土屋明美、宮川東がおこなった。
- 7 遺物の実測、トレースは、菱山かつよ、保坂岳志、川住みち子、大沼美佐江、古屋てるみ、がおこない、遺構関係のトレースは玄間千鶴がおこなった。
- 8 本書は、小林広和、里村晃一が編集、執筆した。

目 次

序文	
例言	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2章 地理的環境と歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第3章 弥生時代	7
第1節 造構と遺物	7
第1号方形周溝墓	7
第2号方形周溝墓	10
小 結	12
第4章 古墳時代	17
第1節 造構と遺物	17
第1号円形周溝墓	17
第2号円形周溝墓	21
第3号円形周溝墓	21
第4号方形周溝墓	24
第5号円形周溝墓	29
第6号円形周溝墓	31
第7号円形周溝墓	32
第8号円形周溝墓	33
第9号円形周溝墓	34
小 結	34
總 括	39

挿 図 目 次

第1図 東山南遺跡周辺図	3
第2図 東山南遺跡全体図	8
第3図 東山南A地区遺構配置図	9
第4図 Y-1号方形周溝墓実測図	11
第5図 Y-1号方形周溝墓土層図	12
第6図 Y-1号方形周溝墓出土遺物	13
第7図 Y-2号方形周溝墓実測図	14
第8図 K-1号方形周溝墓実測図	18
第9図 K-1号円形周溝墓土器出土状況及び土層図	19
第10図 K-1号円形周溝墓出土遺物	20
第11図 K-2号円形周溝墓実測図	22
第12図 K-3号円形周溝墓実測図	23
第13図 K-4号方形周溝墓実測図	25
第14図 K-4号方形周溝墓遺物出土状況及び土層図	26
第15図 K-4号方形周溝墓出土遺物	27
第16図 K-4号方形周溝墓出土・直刀、鉸実測図	28
第17図 K-5号円形周溝墓実測図	29
第18図 K-6号円形周溝墓実測図	30
第19図 K-7号円形周溝墓実測図	31
第20図 K-8号円形周溝墓実測図	32
第21図 K-9号円形周溝墓実測図	33

図版目次

- 図版1 東山南遺跡と周辺
　　東山南遺跡遠景（上の平遺跡より）
- 図版2 東山南（A）遺跡と上の平遺跡（3年次）
- 図版3 東山南（A）Y-1号方形周溝墓全景
　　遺物出土状況（台付壺）
　　遺物出土状況（壺）
　　周溝堆積状況
- 図版4 東山南（A）Y-2号方形周溝墓全景
　　周溝堆積状況
- 図版5 東山南（A）K-1号円形周溝墓全景
　　K-1号円形周溝墓・セクション付
- 図版6 遺物出土状況（小型壺）
　　遺物出土状況（壺）
　　周溝堆積状況
- 図版7 東山南（A）K-2号円形周溝墓
　　周溝堆積状況
- 図版8 東山南（A）K-3号円形周溝墓
　　周溝堆積状況
- 図版9 東山南（A）K-4号方形周溝墓全景
　　遺物出土状況（南溝・集中区）
　　遺物出土状況（北溝・直刀）
- 図版10 遺物出土状況（把手付壺）
　　遺物出土状況（小型壺）
　　周溝堆積状況
- 図版11 東山南（A）K-5号円形周溝墓全景
　　周溝堆積状況
- 図版12 東山南（A）K-6・7号円形周溝墓全景
　　周溝堆積状況
- 図版13 東山南（A）K-8号円形周溝墓全景
　　周溝堆積状況
- 図版14 東山南（A）K-9号円形周溝墓全景
　　周溝堆積状況
- 図版15 東山南（A）Y-1号・K-1号出土遺物
- 図版16 東山南（A）K-4号南溝出土遺物
- 図版17 東山南（A）K-4号南溝・北溝・東南コーナー出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

中道町下向山字上の平から字東山一帯を対象とした、公園整備に先立ち『風土記の丘基本構想』が昭和50年3月、「基本構想」が昭和50年5月に山梨県によりまとめられた。

ここでは、上の平遺跡はサッカー、テニスコートに、東山南遺跡は大芝生広場、植物園が充てられた。これらの、計画進行に伴い運動広場、芝生公園建設の工事計画が発表された後、上の平、東山南遺跡の重要性に鑑み、山梨県と県教育委員会が協議を行い工事前の発掘調査が計画された。昭和54年度の調査では上の平遺跡で一辺が30m以上を計測する大型周溝墓を含めた、弥生終末期の方形周溝墓55基の群集墓が検出され、次いで55年度での調査では、さらに50基の方形周溝墓を追加した。また、同年には公園取り付け道路工事に伴う、立石遺跡の調査を並行して実施して、甲府盆地では最古と考えられる石器群をAT下位より検出したのを始め、縄文前期初頭の集落を示唆する7軒の住居址群、さらに弥生時代後半～古墳時代初頭の集落および方形周溝墓の検出を行った。特に、弥生時代後半～古墳時代初頭の住居址群、方形周溝墓の検出は、上の平遺跡の広がりを示唆するものであった。

今回の東山南遺跡の調査は、上の平遺跡の北側に隣接するもので、前記した一連の公園造成工事前の発掘調査の第3次調査にあたり、上の平遺跡の広がりの確認を目的とする。

昭和56年5月28日に発掘調査通知を文化庁長官に提出した。調査期間は、同年6月15日～12月22日である。

本遺跡は、農道ひとつを隔てて南側が上の平遺跡、北側が東山南遺跡となり、隣接している。調査は、表土（耕作土）を、重機により削平した後、遺跡確認のための精査を行う。

その結果、遺構の確認範囲は東山三角点から東山北斜面に局部的に集中して検出され、上の平遺跡に接する南側斜面には遺構、遺物の検出はされず、独立した墓域群であることが判明した。

調査経過

6月15日	現地到着、発掘準備。	9月4日	K-4号より直刀出土。
6月20日	重機による表土削平。		K-8、9号掘下げ開始。
7月1日	精査、遺構確認調査。	9月7日	杭打ち作業終了。
7月20日	杭打ち開始。	9月9日	K-1、2、3、4、8号土層図作成。
7月22日	K-1号掘り下げ開始。	9月11日	K-5、6、Y-2号土層図作成。
7月24日	K-2、3、4号掘り下げ開始。	9月13日	K-7、Y-1号土層図作成。
8月2日	K-5号掘り下げ開始。	9月16日	K-9号土層図作成。
8月7日	K-6、7号掘り下げ開始。	9月25日	遺構平面図作成。
8月12日	Y-1号掘り下げ開始。	10月3日	全体図作成。
8月21日	K-1号ブリッジ付近より甕出土。	10月12日	写真撮影。調査終了。
8月25日	Y-2号掘り下げ開始。	10月13日	埋め戻し作業開始。
9月3日	K-4号南溝より、把手付鏡、高杯出土。		

第 2 章 地理的環境と歴史的環境

第 1 節 地理的環境

東山南遺跡の存在する中道町は甲府盆地の南東部に位置する。甲府盆地は山梨県中央部に当たり、この盆地内を流れる釜無川、笛吹川の流れに沿って山梨県最大規模の平坦地が広がっている。両河川の合流点の鎌沢町付近より北上すると釜無川は八ヶ岳山麓を経て諏訪盆地に至り、続く松本平を含めて一構造盆地をなしているが、韭崎付近では平坦地が少なくなり、丘陵地帯が河川の両岸に続いている。一方、笛吹川は東北方向に上流部が伸び、多くの支流に分かれながら秩父山地に至るが、平地が広がっているのは塩山市付近までである。このように甲府盆地は二本の主要河川の流域によって形成されるため、中心部は三角形を呈し、上流部に向かってさらに広がり「Y」字状となる。

甲府盆地北東部は、笛吹川、重川の流域沿いに丘陵地帯が続き、笛吹川の支流は右岸に10~15kmの流れを數本見るが、いずれも大きな扇状地を形成するに至っていない。

笛吹川流域は、下流の盆地底部と曾根丘陵・中流の扇状地・上流の丘陵地帯に三大別され、釜無川は盆地内部南北に盆地底部を流れ、丘陵・山地から距離を置くのに対し、笛吹川沿いは山が間近に迫り複雑な地形を形成している。

南東部は、東西方向に伸びる駿遊ヶ岳、春日山、滝戸山の山裾が緩やかになり、本遺跡が存在する曾根丘陵と総称される丘陵地帯が東西に広がっている。この丘陵の先端は、東より坊ヶ峰、東山、米倉山、王塚等の高位段丘が位置し東西12.5km、南北3kmの広がりが認められる。

背後の山々から緩く下った斜面は高位段丘の先で急傾斜となって盆地底部に至り、距離を置かず笛吹川が流れている。曾根丘陵の直下を流れる笛吹川の支流は南北方向の本流に流れ込み、左岸の支流は曾根丘陵の背後を流れる芦川を除くと、いずれも小河川である。右岸の支流は盆地を南下するため下流ほど支流の長さが長く、荒川は盆地中央部を釜無川と並行して流れている。坊ヶ峰は曾根丘陵東端に当たり、東側を境川が笛吹川へと流れ込む。これより東方は笛吹川と背後の山々との距離が大きくなり、笛吹川の各支流も長さを増し、多くの扇状地を形成して境川の東に浅川、天川と続く。金川は甲府盆地を流れる笛吹川支流の中では最大級のもので、背後の御坂山地に源を発し、北西へ15km流れ込む。この合流点付近の笛吹川右岸は大藏經寺山が突出し、平地が1km前後しかなく最も狭まる地域で、曾根丘陵沿いの地域では笛吹川右岸に平坦面が大きく広がりを見せていたのが、金川を中心とする上流部では逆転し左岸に平坦面が拡大することになる。金川の合流点のさらに上流部で笛吹川は大きく3本に分かれる。笛吹川本流は秩父山地に向い、重川が大菩薩方面へ、日川は笛子を目指して途中で北上し大菩薩峠に至る。日川の支流の御手洗川が、金川と並行して流れ上流部で典型的な扇状地を形成している。

この両者に挟まれた盆地北東部は北に広がり大藏經寺山、八人山、愛宕山より西側は荒川の本・支流によって形成された扇状地の分だけ平坦地が北に広がっている。このように、甲府盆地は日本でも有数の高山に囲まれ、中部高地と称されるような山岳地帯でありながら、平坦地は



第1図 東山南遺跡周辺図

(国土地理院 50,000分1.甲府)

■ 4世紀代 ● 5世紀代

1. 大塚古墳 2. 王塚古墳 3. 三星院古墳 4. 小平沢古墳 5. 天神山古墳 6. 銚子塚古墳

7. 東山南遺跡 8. 丸山塚古墳 9. 茶塚古墳 10. 大丸山古墳 11. 八乙女2号墳 12. 八乙女1号墳

一辺15km前後の三角形状の広がりを持ち、周辺の丘陵地帯をも含めば、盆地としては大型であるばかりでなく、海浜部の小平野を凌駕する規模を有する。しかし、外辺部に連なる山々があまりにも高く、盆地外部に流れ出す富士川の流域は、両岸に急峻な山々が続き、駿河湾に至るまでの間、殆ど平坦地を見ることなく続き、甲府盆地の孤立感を一層強くしているようである。

第2節 歴史的環境

笛吹川南岸地域で、特に遺跡の乗る曾根丘陵の周辺は古くより調査が実施されており、近隣の地域に比べより多くの遺跡が知られている。又、近年の開発による発掘調査が実施され多くの遺跡の情報が集積されて、本地域では遺跡の時期別な展開および地域概要を把握することができる程度可能なものとなっている。

旧石器時代では、米倉山遺跡、下向山遺跡、浅利遺跡の3カ所が古くより知られている。近年では浅利遺跡の周辺で豊富村矢次郎遺跡、横畠遺跡に、ナイフ形石器が1点ずつ確認されているがいずれも単独出土である。米倉山の東側に谷を隔てた台地上には、上の平遺跡が存在するが、それに隣接して南側に宮の上、立石遺跡と関連遺構の検出があり、遺跡の広がりを示唆している。

ここからは、主にナイフ形石器が検出されているが、この中では立石遺跡での調査例のみが層位的に観察可能であり、その他は単独で出土層位が確認されたものでない。包含層はAT層を挟んで、上層に1枚、下層に2枚の合計3枚が確認されている。確認された上部2枚の包含層は、ナイフ形石器を中心とする石器群であるが、最下層では基部および先端を欠損する石刃が検出されているのが特筆される。

縄文時代早期では、丘陵南部の三珠町で押形文土器、条痕文土器が少量確認されるに止まっているのが現状である。

縄文前期初頭では、立石遺跡で木鳥式期の住居址7軒が確認されており集落が想定され、中部高地に視野を広げても傑出した内容をもっている。該期では、八ヶ岳山麓の大泉村・金生遺跡を始め数箇所の確認がなされており拡散する様相を示しているが、金生遺跡を除く多くは未報告である。前期中葉から後半では、大集落が想定される花鳥山遺跡がある。ここでは土器、石器以外に、炭化物、魚骨等の生活廃棄物に関連する動物遺体が多数検出されている。この他には、一の沢遺跡、京原遺跡をはじめ小規模な遺跡が全域に散見できる。

縄文中期では、上の平、立石遺跡で五領ヶ台期の住居址が確認されており、面的に調査が及べば相当な規模のものが確認されるものと思われる。勝坂期では、その初期から終末にいたるまでの各期のものが上の平、上野原、一の沢、宮の上遺跡で検出されており中道町、境川村を中心に検出例が多く、その内容も豊富である。曾利期にいたると前記と同様な分布を見せるが、密度はさらに濃くなる傾向を示し、笛吹川上流部では駅廻堂遺跡のような大規模集落の出現をみる。

縄文後期になると、資料は少なく中期後半の繁栄から見れば激減するといつてもよい。遺構

関係では、堀の内期の敷石住居跡が一の沢遺跡と大塚遺跡で、加曾利B期の配石がやはり大塚遺跡で認められるにすぎない。

縄文晩期ではさらに資料が減り、調査で若干の土器片が認められる程度となる。

弥生時代では、近年、身洗沢遺跡、上野遺跡での調査がおこなわれている。身洗沢遺跡では、生産基盤遺跡である水田址が確認され、それに伴って若干の木器類等が検出されている。又、上野遺跡では、弥生終末の環濠集落が検出されている。このような例をいれても縄文後期・晩期につづいて解明の遅れが目立っている。水稻が生業の中心となり社会構造が一変するため集落の立地も激変することもあるが、弥生文化の内容を示す遺跡の調査に恵まれないのが現状である。

方形周溝墓関係では東山南麓の上の平遺跡で、128基の方形周溝墓が確認されている。ここでは時間的にも弥生終末から古墳前期に造墓活動が集中して数、規模ともに最大規模で、古墳出現直前の墓制を代表している。

また、本県の本格的な古墳築造開始期、あるいはそれに並行する時期の方形周溝墓関係では上の平遺跡より谷をひとつ隔てた米倉山B遺跡で、4世紀中葉以降の方形周溝墓1基が、さらに曾根丘陵台地の南端側の上野遺跡でパレス壇に近似のものを出土する方形周溝墓が検出されている。

古墳時代は、曾根丘陵の東山、米倉山を中心とした地域を主に、小平沢古墳、銚子塚古墳、大丸山古墳等の大型古墳の出現によって幕をあける。この中で、最古に位置付けられるのは、米倉山の北東端に位置する小平沢古墳である。ここでの出土品は、斜縁を有する漢式鏡1枚が認められるのみで、正式調査によらない道路工事による偶然の収集結果であるが、後続する銚子塚古墳が豊富な副葬品を伴うことから本墳の被葬者が在地的であるといわれる所以である。

さらに墳形は、前方後方墳をとり、銚子塚古墳等が前方後円墳であることから、甲府盆地における古墳導入期の墳形は前方後方墳から前方後円墳への交替形であるといえる。

また、最大規模を有する銚子塚古墳は170m弱で、出現期の前方後円墳としては東国でも最大級の規模を有し、三角縁神獣鏡を初めとする副葬品の内容は畿内勢力との強い関連を示すものであった。また、4世紀最終末から5世紀初頭に位置付けられる大丸山古墳では、主体部に特異な2重石棺の構造をもつことから、京都府妙見山古墳と関連付けられる所以となっている。

これらに続く、5世紀中葉から後半にかけてのものは、前方後円墳で甲府盆地唯一の未発掘古墳として知られている天神山古墳の140mが最大でこれ以後縮少する傾向にある。

茶塚古墳は墳丘規模が縮少するが、初期の馬具をはじめ多くの優秀な副葬品が多数認められて年代も本遺跡に近く、しかも至近距離に存在する事実などから、両者の比較に際してはその内容にせまる重要な意味を含んでいるものと思われる。また、先の天神山古墳以降の甲府盆地では、築造期がTK23~TK47である八乙女塚古墳を除く総ての古墳は、5世紀第3四半期には急速に墳形が前方後円墳から帆立貝型の前方後円墳へと変容する特殊な地域といえる。

古墳後期になると、曾根丘陵上では、築造期が6世紀終末の中道町かんかん塚（博物館構内古墳）と本遺跡の西10mに位置する稻荷塚古墳の調査例がある。ここでは、6世紀第4四半期に製作年代が限定される馬具等とともに、籠手部が方形となる籠手鏡の出土が両古墳に認めら

れる例は、この種の類例が各地に認められず、武具類に局地的な地域色が認められ注目されよう。このほかには米倉山一帯を初めとする曾根丘陵上には数十基の横穴式石室墳の確認がなされているが、既に破壊され消失したものをいれても、分布の密度は薄く曾根丘陵以外の盆地北部、東北部に古墳群の中心が移る傾向にある。

群集墳では盆地北東部の八人山を中心とする横根・桜井積石塚群が展開しており、その築造時期は5世紀末から6世紀が考えられ7世紀までおよんでいる。また盆地北西部の釜無川流域でもある程度のまとまりをもって古墳群が認められ、竜王赤坂台古墳群を初めとする後期古墳群の調査が実施され、6世紀後半～終末にかけての馬具が検出されている。さらに笛吹川上流部の山梨市周辺まで横穴式石室の分布が認められる。これらの中小古墳群の資料の集成により立地、遺物の内容の対比により被葬者等の推定の手掛かりとなっている。これらの後期古墳の中には、他の中小古墳とは規模が隔絶した大型石室墳が点在して盆地東部の御坂町姥塚古墳、八代町地蔵塚古墳と北西部の甲府市万寿森古墳、加牟那塚古墳が盆地を挟むように対峙している。さらに時代が下ると、盆地東部では、春日居町に7世紀後半の寺本廃寺、一宮町に国分寺が創建される。

この様な変動の背景は、駿河湾からの交通路の変遷を主に意義づけられて来た。それは、古墳時代前半は東山周辺の古墳群の位置から東山の西側を流れる瀧戸川を遡上し右左口峠を越え富士西麓から静岡平野に出る中道往還が唱えられて久しいが、盆地内部の笛吹川沿いにも古式古墳が点在することから富士川沿いにもルートが想定されている。

後半では、四ツ塚古墳群が密集する金川の上流部を遡上し、御坂峠を越え山中湖畔にいたるルートが重視される。後世「鎌倉往還」と称された様に、静岡平野だけでなく、相模平野に出ることも可能となる。このような交通路の変更は、後半からの交通手段が馬匹を主体にしたものに移行するため、最短距離であるが急傾斜の「中道往還」から、傾斜が幾分緩い迂回路である御坂路に変化したものとされているが、当時の社会の多様な要素がその背景にあったものであろう。

第3章 弥生時代

第1節 遺構と遺物

本遺跡の南方 170 m には、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての本県最大規模の上の平方形周溝墓群が存在するが、上の平遺跡の最北端に位置する上の平第 100 号方形周溝墓から東山三角点に至る間は、南向きの緩斜面を形成して、条件的には遺構の構築には適さない状況となつておらず、したがつて遺構の確認はされない。また、本遺跡の乗る地域は、渕尾根状に発達して、付近一帯より小高く独立した状況を呈している。

しかも、その北斜面上の景観のよい場所に占地している。このため、上の平方形周溝墓群との連続性は遮断された様相を呈している。

さて、今回の調査で検出された弥生終末期に属する方形周溝墓は 2 基で、東山三角点 (340.2 m) の西よりに、Y-1 号が 34.2 m、Y-2 号が 80 m の位置に検出され、共に北斜面上に存在する。規模は若干異なるが平面形態は酷似して、主軸方向もほぼ同一方向を向いており、出土遺物は 1 基のみしか認められないが、2 基とも限られた時間内に構築されたものと考える。

東山南 A 地区・第 1 号方形周溝墓

遺構（第 4 図）

遺跡の遺構群の配置の中では、中央部に占地しており、周溝墓は Grid (58, 62-1, e) の範囲内におさまる。

桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、墳丘及び主体部は全く消失しており、周溝のみが検出された。

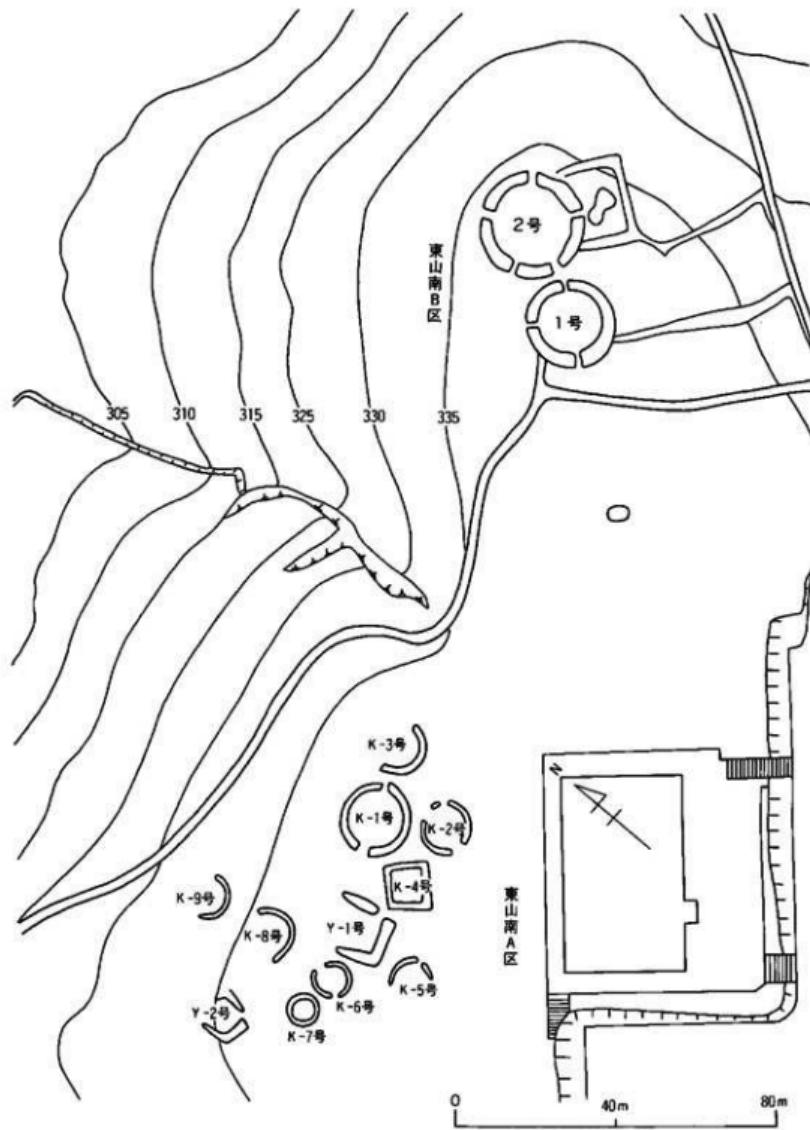
形態は、北部周溝部が削平され消失しているが、ブリッジを一隅に設置する形態のものであることが推定され、左コーナー角度がやや開く形態である。

規模は、削平されている為、全容は不明確であるが、右軸 10.8 m、右軸右位方台辺 9.2 m、左軸左位方台辺 10 m である。

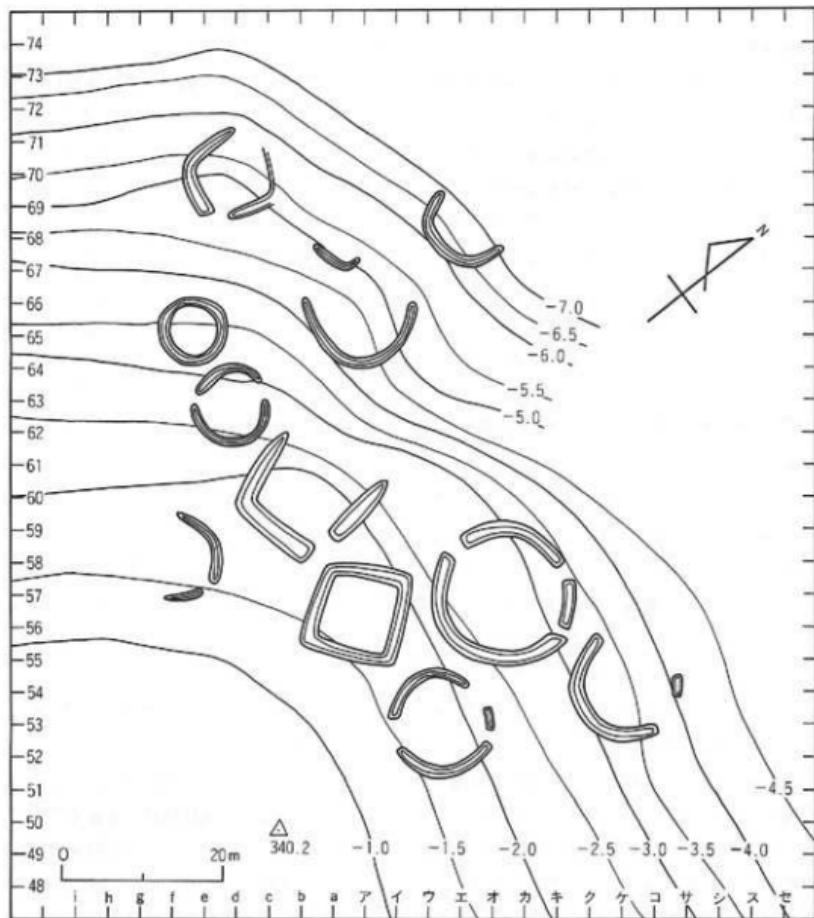
主軸方位は、ほぼ N-60°-E を指す。溝状態は、平面で各辺が直線状を呈している。溝断面形態は、横断面 A-B で、溝最深部が中央よりやや方台部よりにあり、頂点が円みを持つ逆三角形を呈する。堆積状況は整然とした、レンズ状を呈する。横断面の状況は、ブリッジに近づくにつれて深度が浅くなる傾向を示し、縦断面 G-H ではそれが顕著である。堆積土は、周囲全体に黒色系の土壤層が確認されており、緩やかな時間をかけて堆積作用が進行した状況を示す。

遺物出土状況

壺 1 点、台付壺 1 点の計 2 点が出土する。台付壺は右軸右位のほぼ中央部の溝最深部の底部より検出される。台脚部は、埋設時に破壊され消失し、壺部のみが原型を保ち埋設される。壺は、左軸左位溝の陸橋部よりの溝部の浅い箇所で黒色系土壤中より浮いた状態で、5 cm 大の破



第2図 東山南遺跡全体図



第3図 東山南A地区遺構配置図

片に破壊され検出される。

出土遺物（第6図）

1は、台付型で、形態は、最大幅を胴部中央よりやや上位に位置する。脚部付近で極端に狭まり無花果形を呈する。台脚部は欠損する。口径21.4cm、高さ25.7cmを計測する。風化が進むが器面観察は可能で刷毛調整痕は外面器面で全面に認められ、胴下部で縦位、胴部中央で斜位、胴部と口縁部とのつなぎの縫合部では縦位、口縁部では斜位に観察が可能である。内面では、口縁部で横位、底部付近で斜位に認められる。

2は、折り返し口縁の壺である。口径12.6cm、縫合部径6.4cm、胴部最大幅16cm、底径7.7cmを計測する。

その他、1号方形周溝墓確認作業中、周溝外よりガラス小玉1点が検出された。色調はコバルトブルーで、法量 6×3 mmを計測する。

東山南A地区・第2号方形周溝墓

遺構（第7図）

東山遺跡の遺構群の配置の中では、最西部を占めており、周溝墓はGrid(68, 72—b, f)の範囲内におさまる。

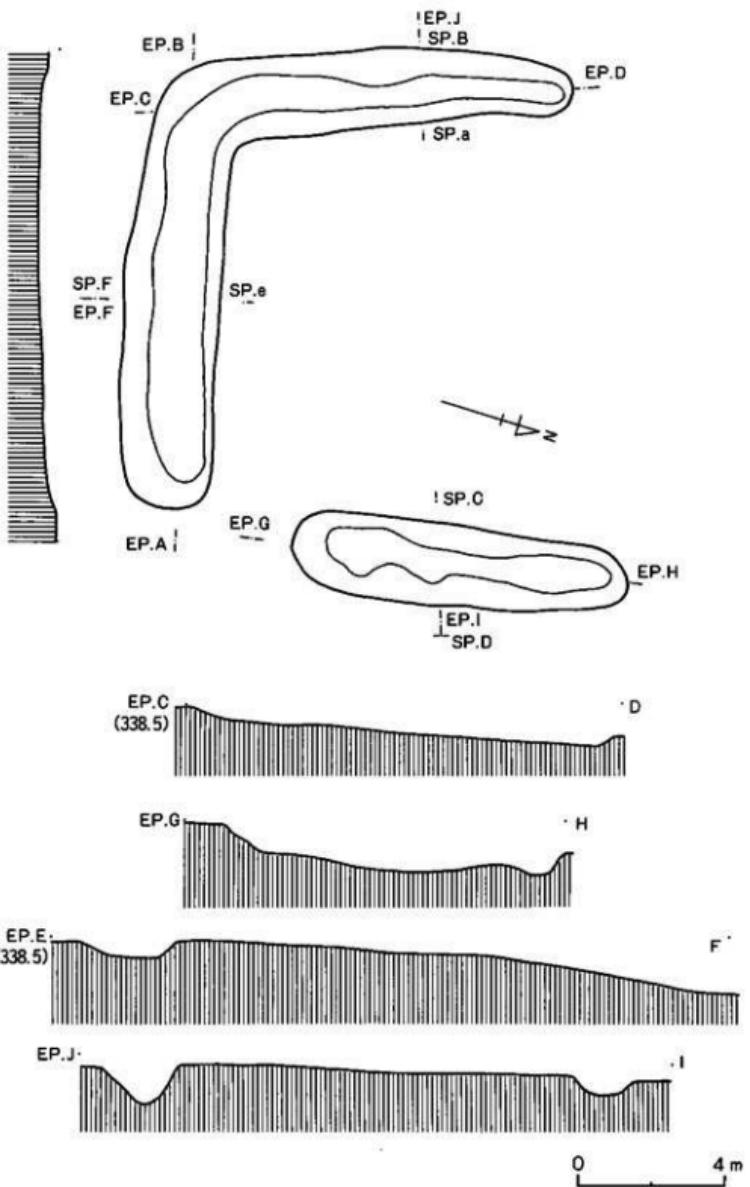
乗園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、墳丘及び主体部は全く消失しており、周溝のみが検出された。急斜面上に位置するためエレベーションポイントA及びBでの方台部での比高差は50cmに達する。

形態は、北部周溝部が削平され消失しているが、ブリッジを一隅に設置する形態のものであることが推定され、左コーナー角度がやや開く形態であり、第1号方形周溝墓より小型であるが平面形は類似する。

規模は削平されている為、全容は不明確であるが、右軸7.9m、右軸右位方台辺6.4m、左軸左位方台辺6.8mである。主軸方位は、ほぼN-38°-Eを指す。溝状態は、平面で各辺は基本的には直線状を呈するが、右軸左位溝中央コーナー部よりも方台部によりやや湾曲する。

溝断面形態は、横断面a-bで、溝最深部が中央よりやや方台部によりにあり、レンズ状を呈する。堆積状況は整然とした、レンズ状を呈する。横断面c-dは方台部よりも最深があり、方台部よりも急激に立ち上がり、外壁よりも極端な緩斜面となる。縦断面の状況は、I-Jでは平坦な溝底を呈しており、削平を受けているが、北側に深度をます傾向を示しており、傾斜に対応して溝の掘削が施されたことを示すものと思われる。

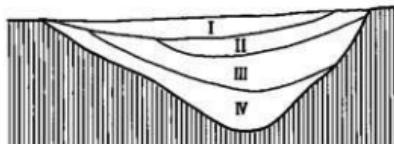
堆積土は、周溝全体に黒色系の土壤層が確認されており、緩やかな時間をかけて堆積作用が進行した状況を示している。出土遺物なし。



第4図 東山南A地区・Y-1号方形周溝墓実測図

SP.b

SP.a



土層説明
I層：黒褐色土。粘性しまり有り、粒子細い均一の土壤層。
II層：不透水土。粘性しまり有り、1-3mの黒色・赤色粒子含む。
III層：灰黒褐色土。粘性弱、1-3mの黄色粒子含む。
IV層：暗黄褐色土。粘性しまり有り、赤・黃色子含む。

SP.d

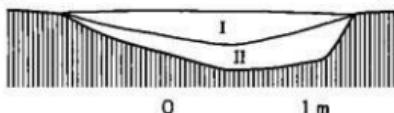
SP.c



土層説明
I層：黒褐色土。粘性弱、均一の土壤層。
II層：茶褐色土。SP.A-B II層に近い。

SP.f

SP.e



土層説明
I層：茶褐色土。SP.A-B I層と同。
II層：茶褐色土。SP.A-B II層と同。

第5図 東山南A地区・Y-1号方形周溝墓土層図

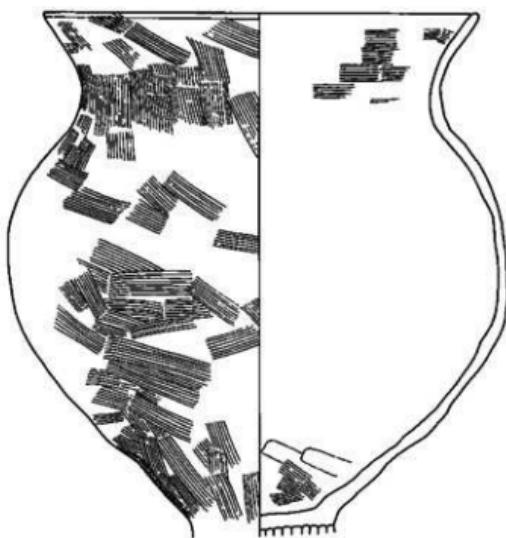
小 結

弥生時代の方形周溝墓は、東山三角点より北西32m離れた地点で東山南A地区・Y-1号が遺跡のほぼ中央に占地して、さらに北西に76m離れた地点に東山南A地区・Y-2号がある。東山南A地区・Y-1号は、左軸左位溝が標高339.5m～339mの間にあり比較的平坦地に乗るが、他の溝は傾斜面にかかり、方台部での比高差は1m以上を計測する。東山南A地区・Y-2号は、墓群範囲の西北端に位置しており、傾斜面にかかっているが等高差の少ない比較的平坦な箇所を選定しているのと、規模が東山南A地区・Y-1号より小さいため、比高差は50cm前後に止まっている。

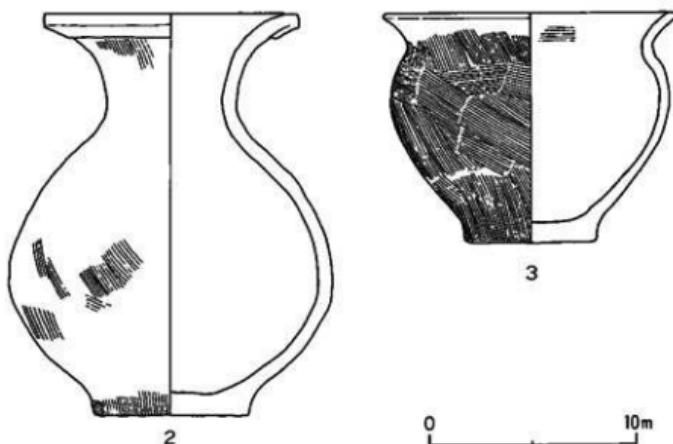
本遺跡の南方170mには、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての本県最大規模の上の平遺跡の方形周溝墓群が存在するが、その上の平遺跡の最北端に位置する上の平遺跡100号方形周溝墓から東山三角点に至る間は、南向きの15°前後の斜面を形成しており、条件的には人為的施設の構築には適さない状況で造構の確認はされない。

また本遺跡の乗る地域は、瘦尾根状に発達して、付近一帯より小高く独立した状況を呈している。しかもその北斜面上の景観のよい場所に占地している。

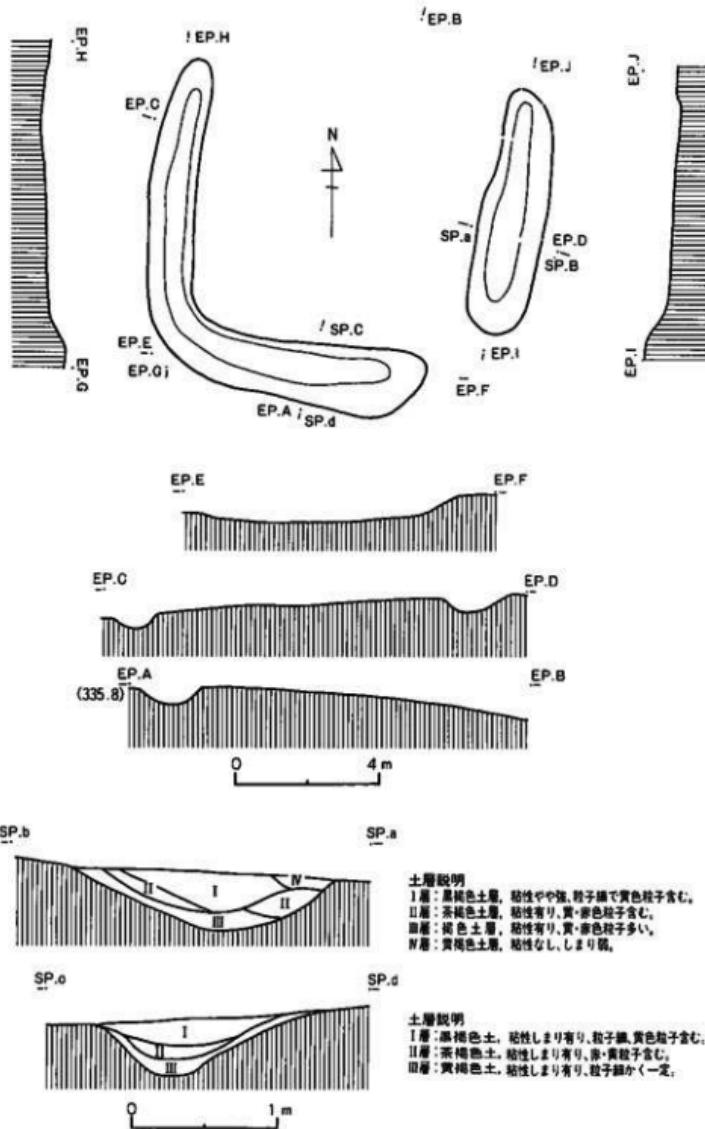
このため、上の平方形周溝墓との連続性は遮断された様相を呈する。しかし、時間的には、



1



第6図 東山南A地区・Y-1号方形周溝墓出土遺物



第7図 東山南A地区・Y-2号方形周溝墓実測図

東山南は弥生終末に限られて上の平遺跡の造墓活動の最盛期にあたることから、東山南遺跡の存在意義の解釈は、上の平遺跡の延長上に解釈することも可能であることから、本遺跡の方形周溝墓を、淘汰された独立性の高いものとみるか、上の平遺跡の延長として考えるか意見の別れるところである。

方形周溝墓の形態は2基共、ブリッジを一隅に設けるものであるが、斜面上に構築されているため、左軸右位溝はすでに消失して全容は不明な部分も残るが、左コーナーが開き、右軸左位溝が外よりに振れるため、消失した部分が最長となる。また、溝部での状態はブリッジの先端部幅が共に左軸左位溝側のみ幅広傾向となるのが認められる。さらに、主軸方位もほぼN-60°Eを指す。このように規模の差異を除くと共通点のみが強調されるが、この2基の相異点はブリッジの微妙な位置関係にある。東山南A地区・Y-1号では、右軸右位溝先端上にブリッジが位置する恰好となるが、東山南A地区・Y-2号での先端は、そこまでの伸びがなく手前で止まるが、中央コーナーと対応関係を示し、菱形状を呈する点である。このことからよりも、東山南A地区・Y-2号と東山南A地区・Y-1号とは、僅かの相違点が認められるものの、類似する箇所が多く認められる、このことは2基の築造期が時間的に接近していることを示唆しているものと考えられる。

上の平遺跡での方形周溝墓群は時間的に三世代以上にわたる墓造活動が認められる一方、周溝墓間の溝部の切り合い関係は多く、時間的に接近した同志でも切り合い関係を示すものも少なくなく、飽和状態を示しているとの比べ、東山南A地区での、30m以上の間隔をおく2基の在り方は対照的であり注目される事例である。

次に遺物は、東山南（A）Y-1号より、台付甕1点、折返口縁小型壺1点の計2点、遺構外でガラス小玉1点が検出されているのみで、先の上の平遺跡の調査例と同様に遺物の出土は極めて少ないといえる。

出土状態は台付甕が右軸左位溝のブリッジよりの溝底部で、脚部をあらかじめ破損され消失した状態で認められ、又左軸左位溝のブリッジよりでは、第1層下部で、一個体分の小型壺が破壊され破片で集中して認められた。この土器の出土状態は、方形周溝墓という性格から祭祀行為の結果としてとらえることができる。溝に土器を投棄する以前に破壊する祭祀行為は、古墳時代の溝部に検出される行為と共に通するものがあり、今後、甲府盆地に展開する方形周溝墓等の検討のなかで、位置付け及び内容の評価を行っていく必要がある。

参考文献

近藤義郎	共同体と単位集団	1959年
金井塙良一	古代集落構成歴史教育15-3	1967年
大參義一	弥生土器から土師器へ—東海地方の場合—	1968年
小野真一	沼津市大廓発見の住居址と土器歴史科学20	1969年
富士宮市教育委員会	月の輪遺跡群	1981年
沼津市教育委員会	八兵衛洞遺跡群発掘調査報告	1981年

横浜市埋蔵文化財調査委員会	歳勝土遺跡	1975年
三珠町教育委員会	一条氏館跡遺跡	1988年
三珠町教育委員会	上野遺跡	1989年
甲西町教育委員会	住吉遺跡	1981年
第5回三県シンポ	古墳出現における地域性	1984年
小林広和・里村晃一	上の平遺跡　日本歴史384	1980年
小林広和・里村晃一	山梨県上の平遺跡　日本考古学年報	1982年
山梨県教育委員会	上の平遺跡（第1・2・3次調査）	1991年

(注1) 方形周溝墓の部分名称については、『上の平遺跡』1991年を参照されたい。

第4章 古墳時代

第1節 遺構と遺物

円(方)形周溝墓群は、笛吹川を眼下にする見通しの良い曾根丘陵の先端部、東山三角点(340.2)の乗る瘦尾根上に位置する。この瘦尾根は、東西に長さ300m、幅50mの平坦面をもち、中心から東北方向に屈折する。円(方)形周溝墓は、尾根頂部の平坦面には築造せず、そこよりやや下った北斜面上に展開する。これらは、削平を受け円形の周溝部のみを残す円形周溝墓8基とやはり削平を受け、方形の周溝部が確認される方形周溝墓1基が検出された。遺跡内の中央には弥生終末期の方形周溝墓がすでに築造されており、これを避けるように円形(方)形周溝墓群が築造される。この弥生時代のY-1号方形周溝墓を中心とし、東方の平坦地に方墳を含む15m級の円形周溝墓3基の一群、西方の平坦地に10m前後の円形周溝墓3基、さらにその北方の斜面上に15m大の円形周溝墓2基の3グループに分けられる。この内遺物の出土が認められるものはY-1号方形周溝墓の東方の3基の内の2基である。これらの、土師器、須恵器より年代を推定すると本遺跡の築造年代は5世紀後半代が与えられる。

東山南A地区・第1号円形周溝墓

遺構(第8図)

本周溝墓は、東山A遺跡の周溝墓群の内では、その中心部よりやや東寄りに位置して、Grid(55、59—ウ、ク)に周溝内側がおさまる。

円台部を標高337.7mが通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、周溝内の盛土、及び主体部は全く消失して、周溝のみが検出された。

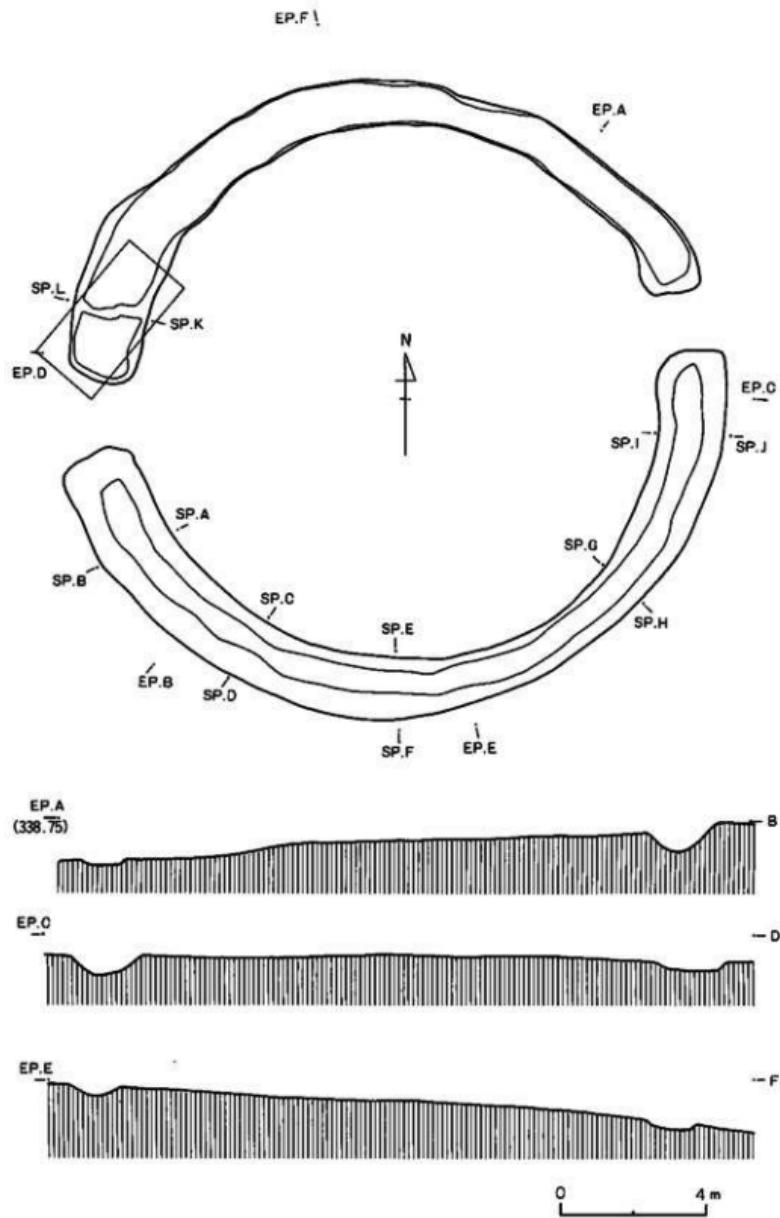
主体部は、削平作用によりすでに消失されて、確認されない。

形態は円形を呈する。ブリッジは東西方向の2カ所に設置されている。周溝部の形態は、平面形では東西ブリッジよりも広がる形態となり、西ブリッジがより広く顯著に認められる。断面は削平により深浅があり、ブリッジより舟底状となる以外は、周溝内側寄り底部が最深となるレンズ状で、堆積状況もこれに対応する。各断面の上位の層では黒色土が堆積している。ほぼ單一層であり、長い期間による土壤層である。規模は、周溝を含めた直径18.2m、円台部14.8mある。周溝幅は平均1m、深さ0.2~0.3m、ブリッジ付近周溝幅2.0m、深さ0.24mである。

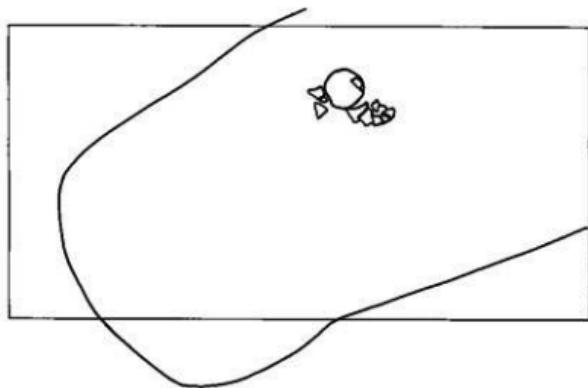
主軸方向はブリッジの中心点を結び軸とすると、ほぼ東西方向となるのが確認される。

遺物出土状況(第9図)

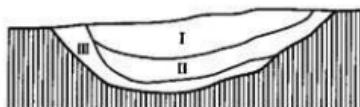
出土箇所は2カ所で、東部ブリッジ南側、西部ブリッジ南側である。東部ブリッジでは、壺1個体が圧し潰されたような状態で検出され、周溝底部に接するか僅かに浮上する位置に確認される。西部ブリッジでは、小型壺1点、杯2点の出土があり、周溝底部より浮上して第Ⅱ層



第 8 図 東山南 A 地区・K-1 号方形周溝墓実測図



SP.A



土層説明

- I層：基褐色土・暗褐色土をブロック状に含む。粘性やや弱り。
II層：暗褐色土。
III層：暗茶褐色土・粘性しまり弱。

B

SP.G

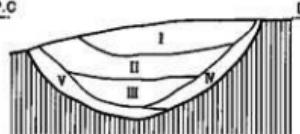


土層説明

- I 黒褐色土 : SP.A-B 土層と同。
II 暗褐色土 : SP.A-B II 層と同。
III 暗褐色土 : SP.A-B III 層と同。
IV 暗茶褐色土 : SP.C-D IV 層と同。

H

SP.C

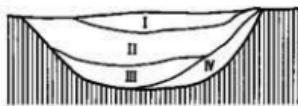


土層説明

- I層：暗褐色土。粒子やや粗く、粘性弱。
II層：SP.A-B I 層と同。
III層：セクション A-B II 層と同。
IV層：暗茶褐色土。粘性強。しまり弱。V層より略。
V層：SP.A-B-I 層と同。

D

SP.I

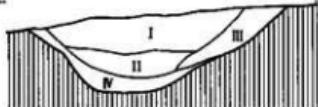


土層説明

- I 黒褐色土 : SP.C-D I 層と同。
II 黒褐色土 : SP.A-B I 層と同。
III 黒褐色土 : SP.A-B II 層と同。
IV 暗茶褐色土 : SP.C-D IV 層と同。

J

SP.E

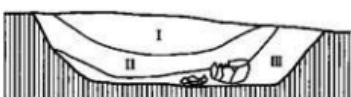


土層説明

- I 黒褐色土。SP.A-B I 層と同。
II 暗褐色土。
III 暗褐色土。SP.A-B II 層と同。
IV 暗茶褐色土。SP.A-B III 層と同。

F

SP.K



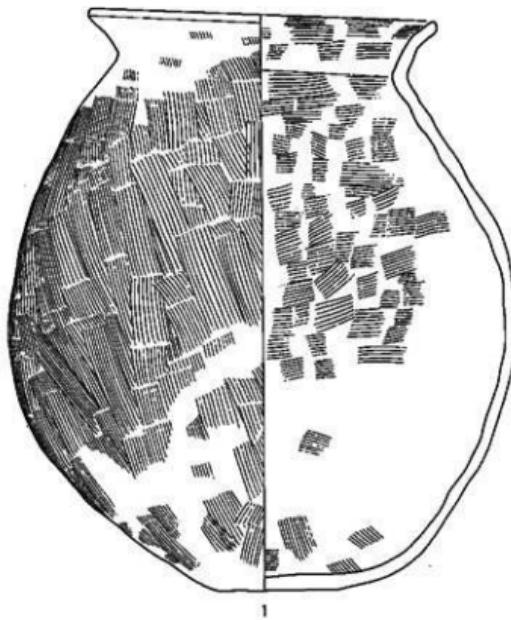
土層説明

- I 黒褐色土・暗褐色土 : 粘性しまり弱。
II 暗褐色土 : 粘性強。しまり有り。
III 茶褐色土 : 粘性弱。

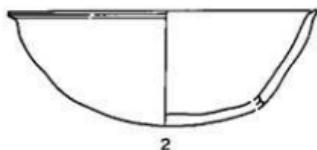
G

L

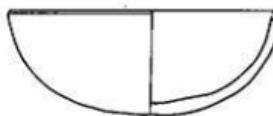
第9図 東山南A地区・K-1号方形周溝墓土器出土状況及び土層図



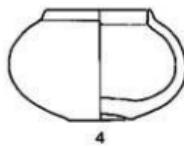
1



2



3



4

0 100m

第 10 図 東山南 A 地区・K-1 号方形周溝墓出土遺物

の暗褐色土より検出される。

出土遺物（第10図）

1は壺で、法量は口径 17.43 cm、胴部最大幅 25.43 cm、底径 6.43 cm、高さ 28.29 cm である。胴部最大幅は胴中央より下位に位置する。胴肩部より口縁部との連絡部にかけて縫れ、連絡部から直ちに口縁にむかって外反する形態を示す。底部は、平底であるが胴部下部と底部との接点が円みを呈しそのまま底部にいたる。内外面共に刷毛調整が顯著である。外面では、口縁部で縫位、それ以下では斜位に調整が認められる。内面では、横位方向に認められる。2は、杯で杯身下位より底部を欠損する。口径 15.43 cm、推定高 5.7 cm をする。3は、碗で口唇部を僅かに欠損する。4は、小型壺で直立する短い口縁部を有する。法量は口径 5.2 cm、高さ 5.5 cm、最大胴部幅 8.8 cm、底部径 3.1 cm である。底部は上げ底状となっている。

東山南A地区・第2号円形周溝墓

遺構（第11図）

本周溝墓は、東山南A地区の円形周溝墓群の中心部よりやや東寄りで、Grid (52、56—1、オ) に周溝内側がおさまる。

円台部を標高 339.85 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、円台部は全く消失しており、周溝のみが検出された。

主体部については、削平作用によりすでに消失しており、確認されない。

形態は円形を呈する。ブリッジの存否は、2号円形周溝墓北側が削平をうけて、不明確な部分が多いが、1号周溝西端部ではブリッジの存在によるものと考えられる周溝端部が認められる。現状での周溝部の形態は、平面形では周溝の中央部が幅広となり、端部が縮まる形態となる。断面は削平により深浅で不明な点が多いが、ブリッジより周溝内側が最深となるが、全体的に底部が円みを帯びるレンズ状となり、堆積状況も対応してレンズ状となる。各断面の上位の層では黒色土が堆積して、単一層であり長い期間による土壤層であることが認められる。

規模は、周溝を含めた直径 14.2 m、円台部 11.6 m である。周溝幅平均 1.6 m、ブリッジ付近周溝幅 1.44 m、深さ 0.3 m である。

主軸方向は削平作用が周溝部の全体におよび不明である。出土遺物なし。

東山南A地区・第3号円形周溝墓

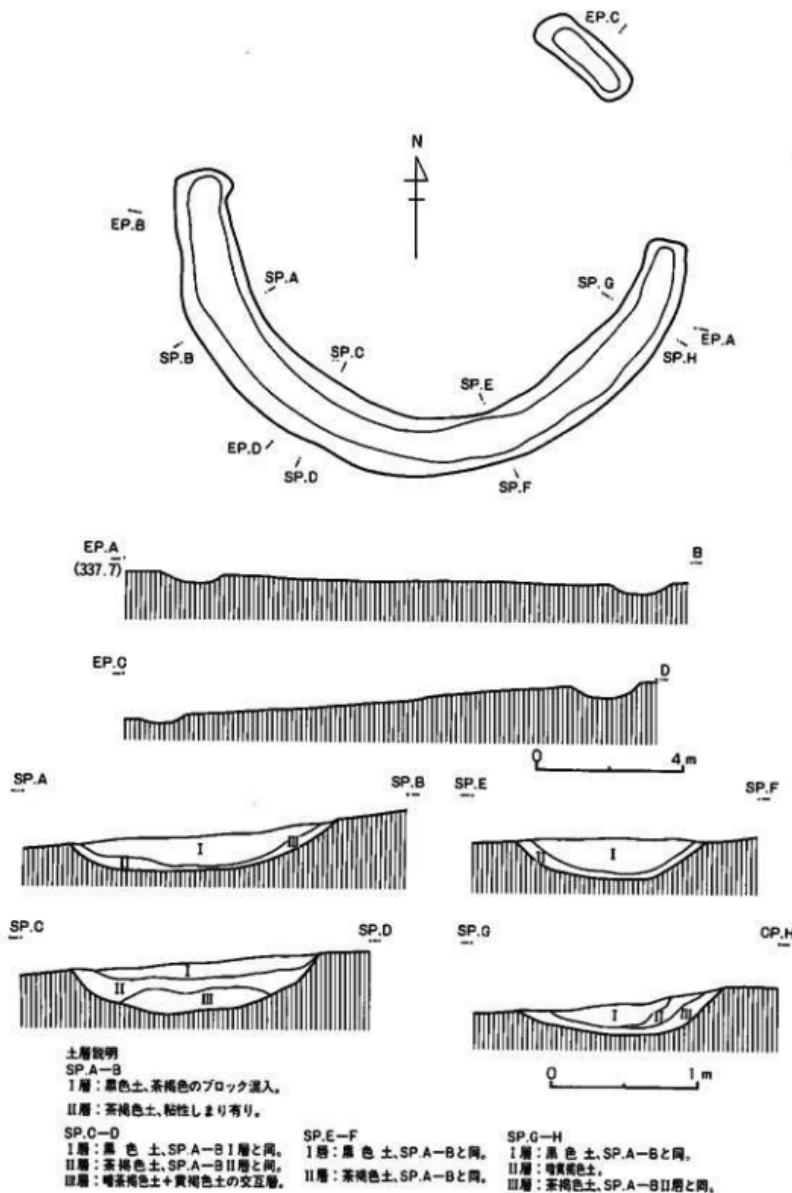
遺構（第12図）

本周溝墓は東山南A地区の円形周溝墓内の中心部よりやや東寄りに位置して、Grid (51、55—1、オ) に周溝内側がおさまる。

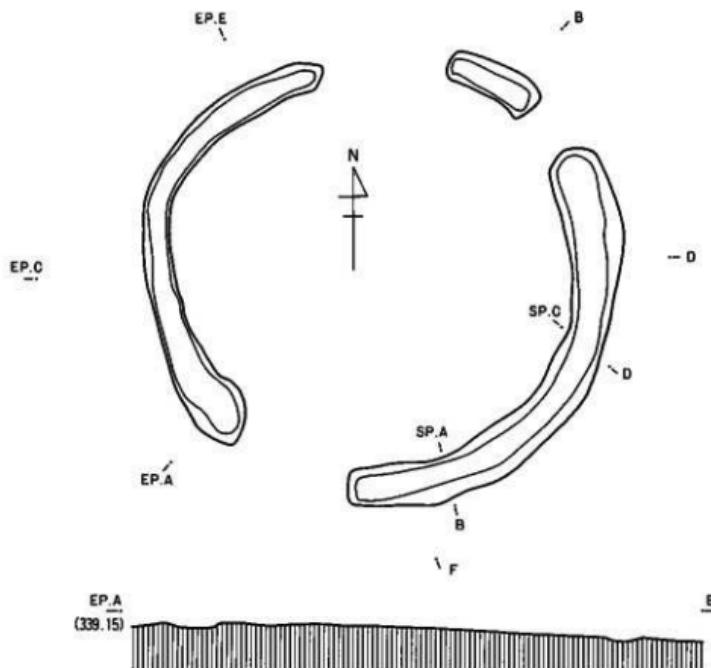
円台部内を標高 338.2 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、円台部は全く消失しており、周溝のみが検出された。

主体部は削平作用によりすでに消失しており、確認されない。

形態は円形を呈する。ブリッジの存否は削平作用が周溝部にもおよび、3カ所に周溝部が消



第 11 図 東山南 A 地区・K-2号方形周溝墓実測図



土層説明
 1層：黒褐色土、粘性有り、しよりなし、茶褐色のブロックを含む。
 2層：黒色土、粘性強、1層に比べサラサラする。
 3層：黒色土+茶褐色土。

土層説明
 1層：黒褐色土、粘性しまりなし、粒子やや粗い。
 2層：暗茶褐色土、粘性強、1層より密。

第12図 東南山A地区・K-3号方形周溝墓実測図

失した箇所が認められ、ブリッジの認定は困難である。

周溝部の形態は、平面形では南側部分の周溝が北側部分の周溝に比較してやや幅広となっているが、地形の制約による結果とされる。

周溝断面は削平により深浅である。周溝部の比較的良好な箇所の2カ所にセクションベルトを設け観察すると、共に底部が最深となるレンズ状で、堆積状況も対応する。黒色土の土壤層が認められ、長い期間による堆積状況が伺える。

規模は、周溝を含めた直径13.2m、円台部11.2mである。周溝幅2.0m、深さ0.2m前後である。出土遺物なし。

東山南A地区・第4号方形周溝墓

遺構（第13図）

本周溝墓は東山南A地区の周溝墓群の内の中心部よりやや東寄りに位置して、Grid(55, 58-1b, イ)に周溝内側がおさまる。

方台部を標高338.45mが通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、墳丘は全く消失しており、周溝のみが検出された。

主体部は、削平作用によりすでに消滅しており、確認されない。

形態は周溝部内側ではほぼ方形を呈するが、周溝部のコーナー部分で周溝部が外側に突出して、周溝部が幅広となる方形周溝墓である。また周溝は全周しておりブリッジは設けられない。

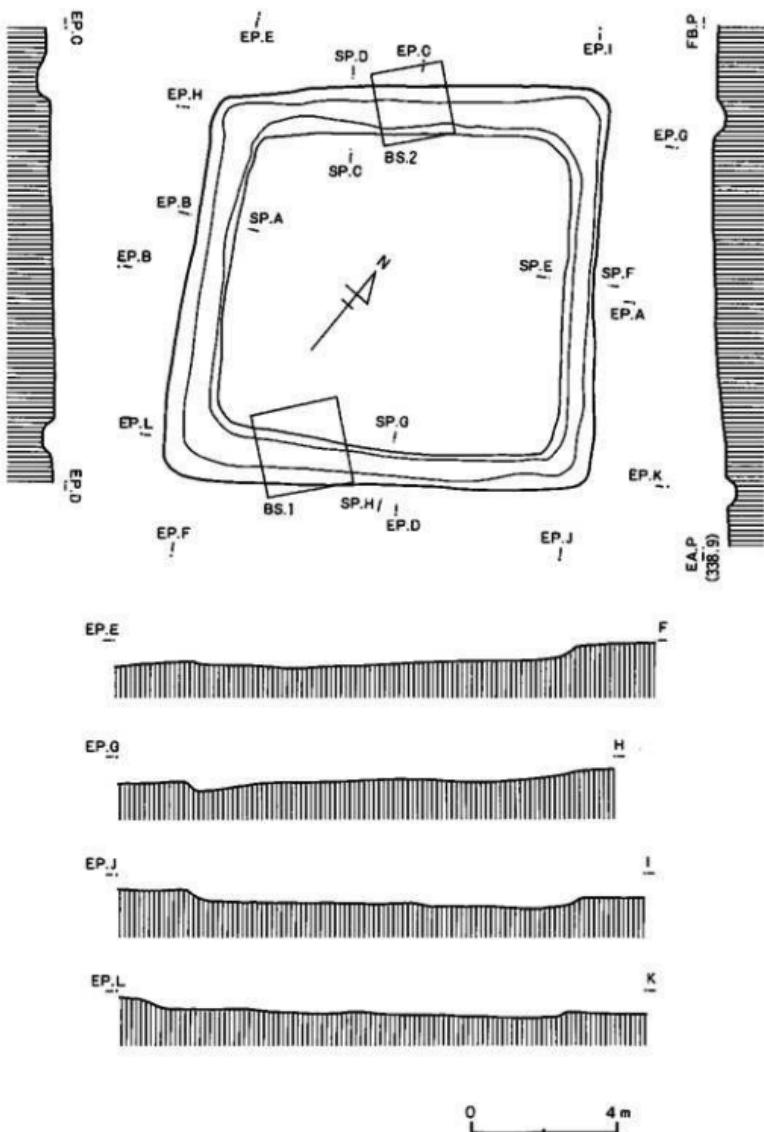
周溝断面は削平により深浅であるが、周溝中央の底部が最深となるレンズ状となり、堆積状況も対応してレンズ状となる。各断面の現状での上位の層では、黒色土が堆積している。ほぼ単一層を形成しており、堆積期間の長い土壤層である。

規模は、周溝を含めた長軸9.2m、短軸8.8mである。周溝幅は平均1m、深さ0.3mである。

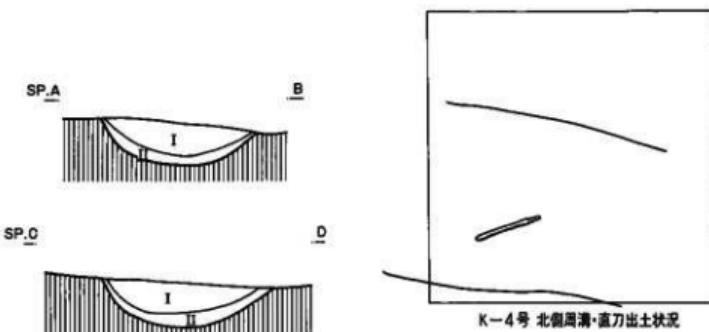
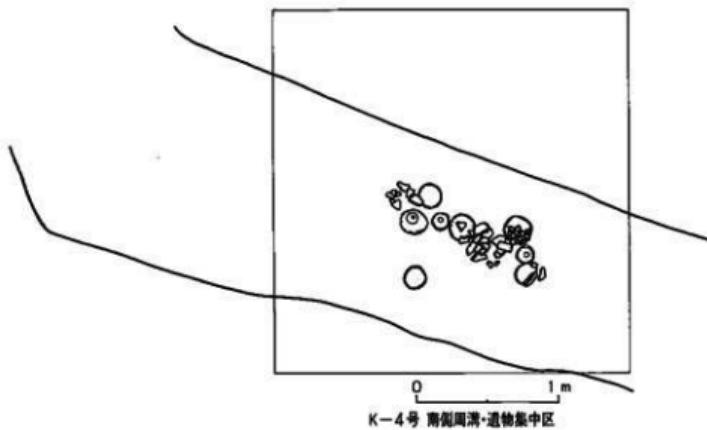
主軸方向は南北コーナーの中心点を結び仮に主軸とすると、N-10°-Wである。

遺物出土状況（第14図）

出土箇所は3カ所で、東南部周溝、北西部周溝、南コーナー部である。東南部周溝では、周溝底部に接して遺物の集中出土がある。その内訳は土師器高杯8点、土師器碗1点、土師器小型壺1点、須恵器（把手付椀）1点である。土師器、須恵器共に埋設前に故意に破壊されて1点の狭い箇所に折り重なって検出される状態からは、葬送儀礼にかかる祭祀行為等の痕跡が窺える。これに対応する位置にある北西部周溝では、直刀1点の出土がある。出土レベルは、やはり周溝底部に接して検出され、溝掘削直後に投棄される。この他には、鉄矛基部破片1点が東南コーナー部より出土する。以上の事実関係をまとめると出土状態の垂直位置が、周溝底部に限定されることや、平面関係での、高杯、把手付椀等の特種遺物の一群と直刀が対応する位置にあることなどから、主体部埋設に伴なう一連の祭祀行為と推定され、限定された時間内に、これら遺物群が周溝に埋設されたものと考えられる。



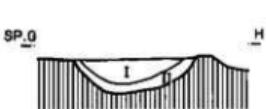
第 13 図 東山南 A 地区・K-4 号方形周溝墓実測図



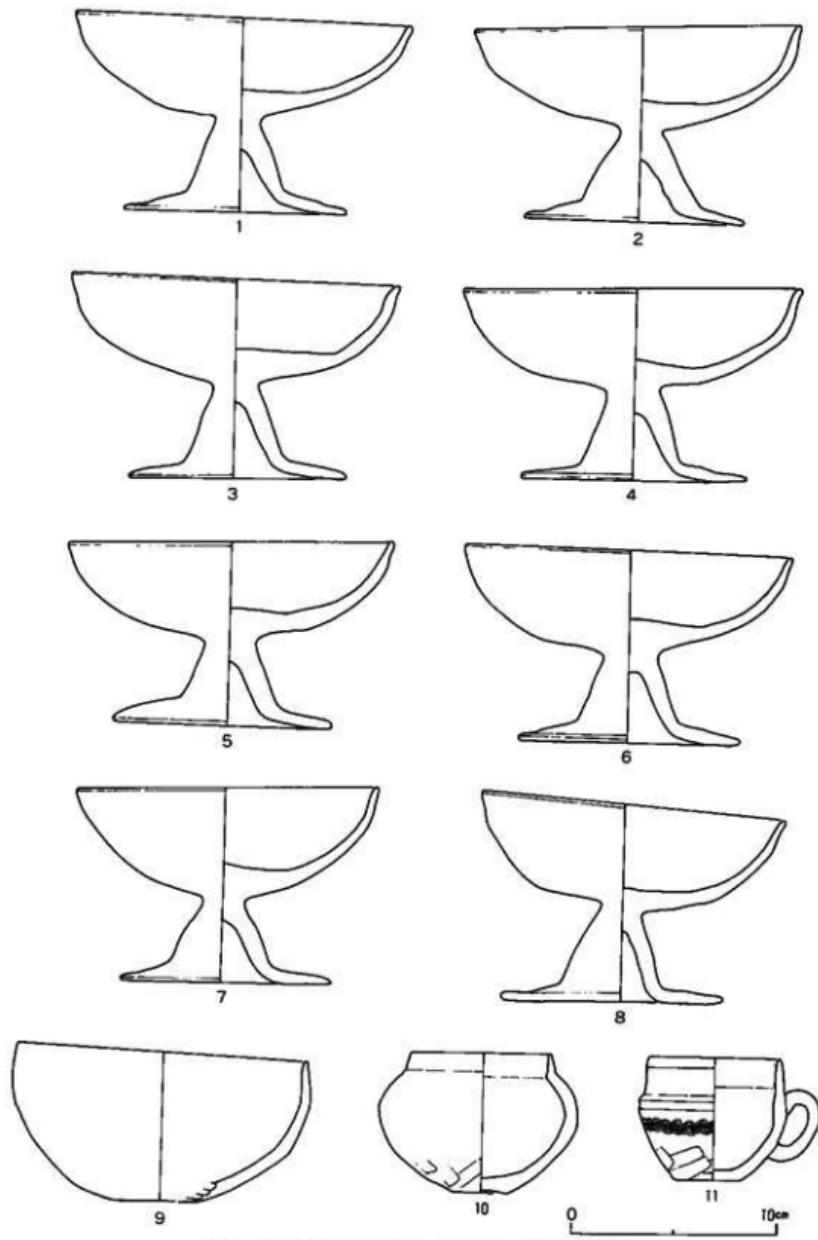
土層説明 (セクション A-B, C-D, EF-G-H 共通)

第Ⅰ層：黒褐色土・粘性やや有り、土壤層。

無日層：暗茶褐色土・粘性弱、しまりなし。



第 14 図 東山南 A 地区・K-4 号方形周溝墓遺物出土状況及び土層因遺跡



第 15 図 東山南 A 地区・K-4 号方形周溝墓出土遺物

出土遺物（第15図）

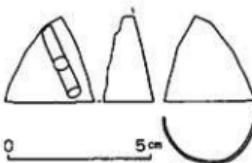
1～8は、高杯で杯部は浅く、胴中央で緩やかに広がり、口縁部付近で急に立ち上がる形態である。脚部は、下部で急激に広がる形態である。丁寧な仕上で整形されており、調整痕は口縁に平行に僅かに認められる程度で、器面全体は滑らかなものとなっている。法量は以下のとおりである。

No	器種	口径	杯身高	高さ	脚部口径
1	高杯	16.7 cm	5.14 cm	9.5 cm	11.0 cm
2	高杯	16.0	5.0	9.57	10.71
3	高杯	16.1	5.14	9.7	10.7
4	高杯	16.7	4.8	9.4	11.4
5	高杯	16.1	4.4	9.0	10.8
6	高杯	16.0	4.7	9.5	10.4
7	高杯	14.8	4.7	9.6	10.4
8	高杯	15.0	4.7	9.7	11.0

9は小型臺で、口縁部は小さく直立する形態である。法量は口径6.21 cm、高さ6.9 cm、胴最大径9.8 cm、底径2.7 cmである。

10は、把手付椀で口縁部が長く直立して口縁部と胴部とのつなぎ部で最大径を計測し、底部に向かって狭まる形態である。胴部と口縁部とのつなぎ部には、一条の凸帯が巡り、さらに胴中央部では、楊描による波状文が一周する。胴部最下端部では籠による整形痕が残る。把手部は断面円形の粘土紐で、つなぎ部と胴下位に粘付される。法量は口径6.4 cm、胴部最大径7.3 cm、高さ6.1 cmを計測する。

直刀は、全長34.2 cm、刃幅2 cm、刀身部25.5 cm、茎部8 cmで、目釘穴は、2.5 cmの間隔で3カ所が確認される（第16図）。鉄矛破片は袋部の基部で、袋内側には鐵鎌の基部が鋲びて付着している。



第16図 東山南A地区・K-4号方形周溝墓出土・直刀、鉄矛

東山南A地区・第5号円形周溝墓

造構（第17図）

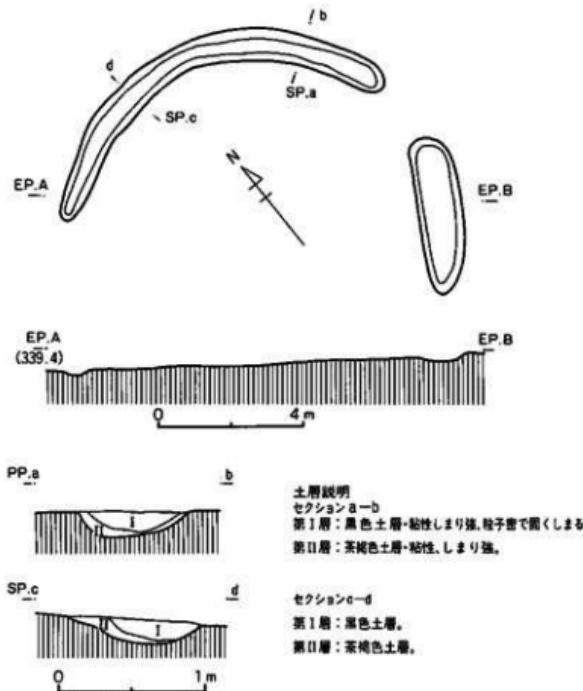
本周溝墓は東山南A地区の周溝墓群の中心部に近く、最南端に位置し、Grid (56, 60-d, g) に周溝内側がおさまる。

周溝内側の円台部を標高 338.7 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、円台部は全く消失して、周溝のみが検出された。

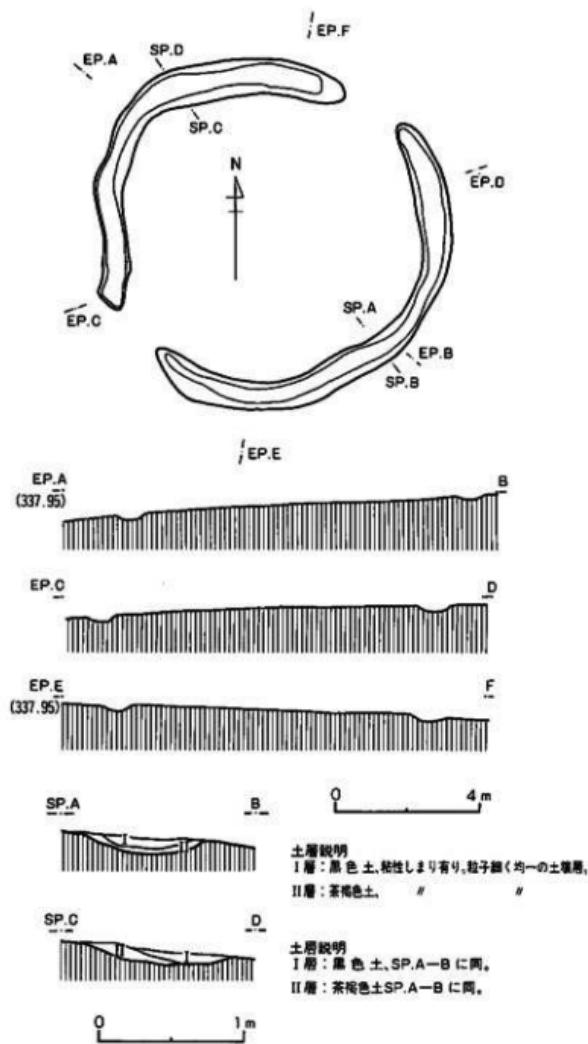
主体部は、削平作用によりすでに消失されて、確認されない。

形態は円形を呈する。5号円形周溝墓西側半分が削平をうけており、不明確の部分が多く、ブリッジ等の施設の有無は不明である。断面は削平により深浅であるが、周溝部よりが急激に立ち上がり、外側が緩やかとなる舟底状となる。堆積状況は、周溝底部に対応して認められる。各断面の上位の層では黒色土が堆積している。ほぼ単一層であり、長い期間による土壤層である。

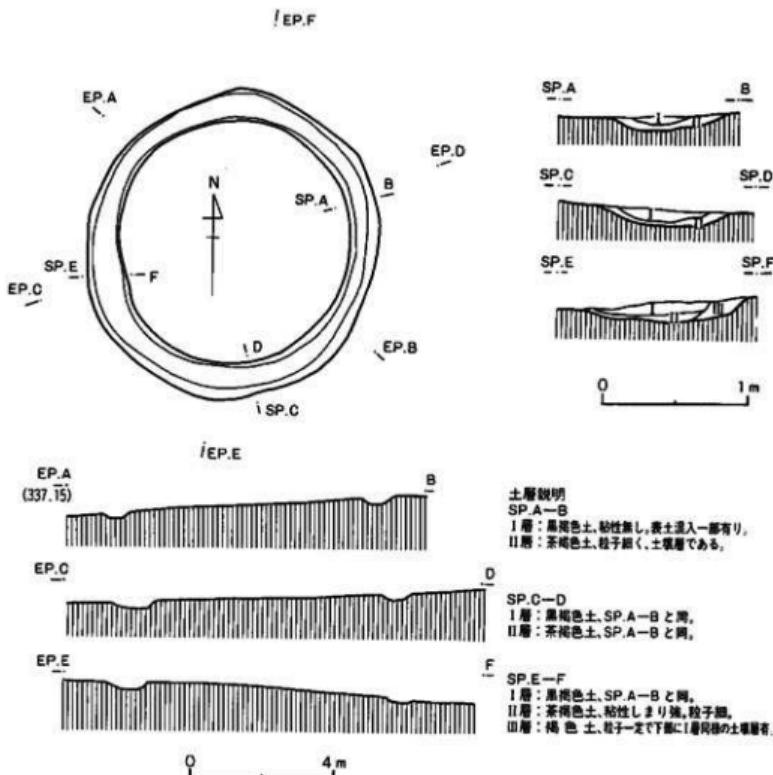
規模は、周溝を含めた直径 10.8 m、円台部 9.76 m である。周溝幅は平均 1.5 m、深さ 0.2 m である。



第17図 東山南A地区・K-5号方形周溝墓実測図



第 18 図 東山南 A 地区・K-6 号方形周溝墓実測図



第19図 東山南A地区・K-7号方形周溝墓実測図

東山南A地区・第6号円形周溝墓

遺構（第18図）

本周溝墓は東山南A地区の円形周溝墓群の中心部よりやや西寄りで、Grid (61, 64-c, f) に周溝内側がおさまる。

周溝内側の円台部を標高 337.4 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、円台部墳丘は全く消失しており、周溝のみが検出された。

主体部は、削平作用によりすでに消失されて、確認されない。

形態は円形を呈する。僅かに周溝底部が残存するもので、現状では周溝の円弧も歪み周溝幅も一定しない。ブリッジ存否は削平が進み、周溝部の2カ所に途切れる箇所も存在するが不明である。断面は削平により深浅であり、形態はレンズ状を呈し、堆積状況も対応する。各断面

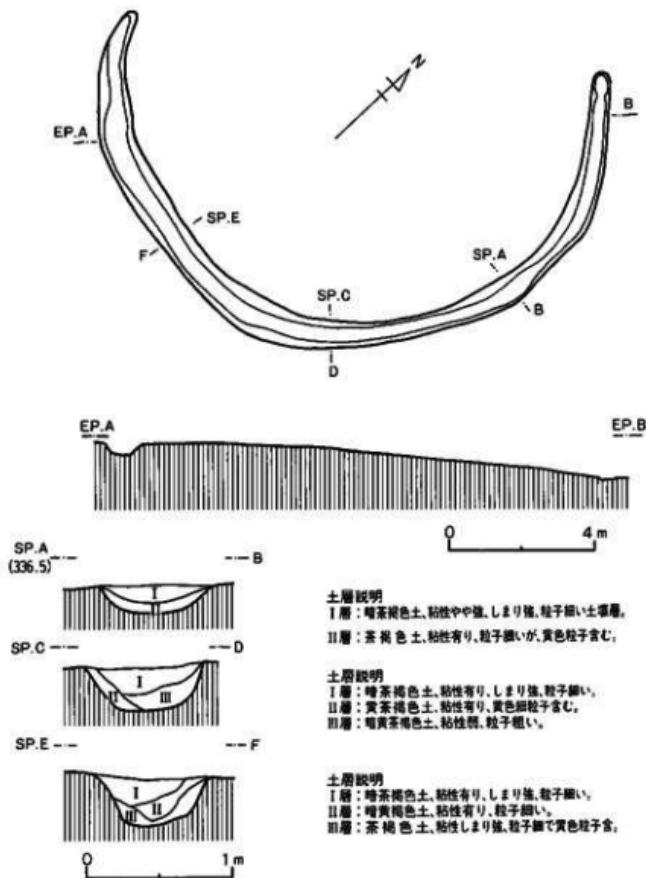
の上位の層では黒色土が堆積している。ほぼ単一層であり、長い期間による土壌層である。

規模は、周溝を含めた直径10m、円台部8.4mである。周溝幅は平均1m、深さ0.1mである。出土遺物なし。

東山南A地区・第7号円形周溝墓

遺構（第19図）

本周溝墓は東山南A地区の円形周溝墓群の中心部より西寄りで、Grid (64, 67-d, g) に周溝内部がおさまる。



第20図 東山南A地区・K-8号方形周溝墓実測図

周溝内側の円台部を標高 336.7 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部にあるためか、円台部は全く消失しており、周溝のみが検出された。

主体部は、削平作用によりすでに消失されており、確認されない。

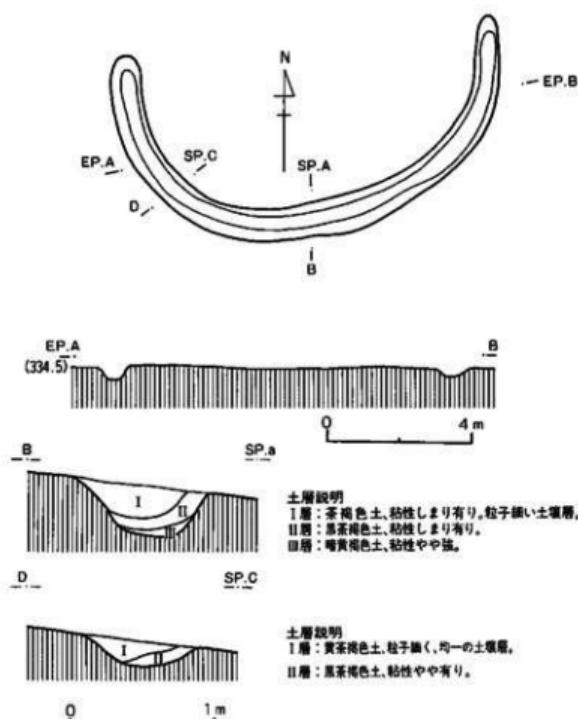
形態は円形を呈する。周溝は途切れることなく全周する。周溝部の状態は周溝幅は一定でなく僅かに増減が認められ、特に北側では周溝外側が突出する。断面は削平により深浅であり、周溝内側寄りで急斜で外よりが緩やかとなる舟形状を呈する。堆積状況も対応して、各断面の上位の層では黒色土が堆積している。ほぼ単一層であり、長い期間による土壤層である。

規模は、周溝を含めた直径 8.72 m、円台部 6.8 m である。周溝幅は 1.0 m、周溝深さ 0.7 m 前後である。出土遺物なし。

東山南 A 地区・第 8 号円形周溝墓

遺構（第20図）

本周溝墓は東山南 A 地区の円形周溝墓群の中心部より西北で、Grid (64, 67—ウ、 b) に周



第 21 図 東山南 A 地区・K-9 号方形周溝墓実測図

溝内側がおさまる。

周溝内側の円台部を標高 335.2 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部より北側に位置するためか、周溝の北側は消失している。主体部は、削平作用によりすでに消失されて、確認されない。

形態は現状で半円形を呈する。周溝部の形態は、平面形幅は一定でなく狭い。断面は削平されるが、台形状を呈する箇所も認められる。堆積状況は底部より整然と対応する。各断面の上位の層では暗茶褐色土が堆積している。ほぼ単一層であり、長い期間による土壤層である。

規模は、周溝を含めた直径 14.0 m、円台部 12.8 m である。周溝幅は平均 0.8 m、周溝深さ 0.3 m 前後である。出土遺物なし。

東山南 A 地区・第 9 号円形周溝墓

遺構（第21図）

東山南 A 地区の円形周溝墓群の中心部より西北端で、Grid (67, 70—カ、ウ) に周溝内側がおさまる。

周溝内側の円台部を標高 333.2 m が通過する。桑園に利用されていた地区にあって、さらに丘陵頂上部より北側に位置するためか、墳丘は全く消失しており、周溝の北側は消失している。主体部は、削平作用によりすでに消失されて確認されない。形態は現状で半円形を呈する。周溝部の幅は一定しない。断面は削平により深浅であるが、周溝残存部中央では、深さ 30 cm を計測して、周溝内側で急激に立ち上がり、外側で緩やかな形態となる。堆積状況は、セクション A・B で三層が確認される。I～III とも単一な土壤層が確認され、上から茶褐色、黒褐色、黄褐色土となる。規模は、周溝を含めた直径 10.8 m、円台部 9.36 m、周溝幅は平均 0.8 m、深さ 0.3 m である。出土遺物なし。

小 結

今回の調査で、古墳時代の方台部が削平された円（方）形周溝墓が 9 基確認された訳であるが、その他に（B）区とした同台地の東方に 100 m 離れた先端部に 2 基の円形周溝墓が確認されている。出土している須恵器からは、A・B 区共に陶邑における中村浩編年第 1 型式第 2 段階～第 3 段階と判断される。従って築造年代の実年代は 5 世紀後半に求められる。これら A 区と B 区との間は約 100 m の距離をおくが同台地に乗る点、さらに円形周溝墓群を構成することや、出土品が僅かな須恵器、鉄製品、土師器などで、その内容が近い点、さらに須恵器からの年代観等の結果から総合的に判断すると、東山南 A・B 区円（方）形周溝墓は一円（方）形周溝墓群としてとらえることができる。ここで、形態は方（円）台部が既に削平されているため、当然周溝の状態からの判断となる。溝内側の台部が方形を呈するものは、方形周溝墓は A 区の K-4 号の 1 基のみである。陸橋部を設けておらず、周溝が方台部を全周する。方台部での形態は、東部よりの一辺がやや長い台形状となっているが、溝外辺の南、北の両コーナーが突出する形態である。円形周溝墓での陸橋部の有無は、陸橋部を有しないもの A 区 K-7 号、2 ケ

所陸橋部を有するものA区K-1号、3カ所の陸橋部を有するものB区K-1号、5カ所の陸橋部を有するものB区K-2号等があり、円形周溝墓では陸橋部の数にばらつきがあり一定しない。

規模は台都でB区のB区K-2号が30m最大であり、ついでB区K-1号の25mとなる。A区では、A区K-1号が18mを計測して最大規模を有するが、最小のものは8.72mであり、B区に比較して規模の縮小化現象が認められる。

群構成では、A、B区の間が100mを計測することにより、A群B群に二大別できる。A群では、造構確認範囲の中央部にあるA区Y-1号を挟んで細分が可能である。東山南A区中央に位置するA区Y-1号を中心に、距離および位置関係からみれば、東方に位置する方形周溝墓を含む、比較的大型な円形周溝墓のAⅠ群（東山南A区K-1、A区K-2、A区K-3、A区K-3、A区K-4号壇）、西方のAⅡ群（A区K-6、A区K-7、A区K-8、A区K-9号）、さらに南方のAⅢ群（A区K-5号）の単独のタイプにわけられる。

この内、西方のAⅡ（A区K-6、A区K-7、A区K-8、A区K-9号）では、規模及び位置、距離よりⅡa（小型のA区K-6、A区K-7号）と北方8m離れた斜面上に位置する、中規模のⅡb（A区K-8、A区K-9号）とに細分される可能性がある。

A区Ⅰ群は、方形周溝墓1基を含む4基から構成されている。規模は最大のA区K-1号が直径18mを、最小の方形周溝墓の最大軸が10.26mを計測して東山南（A）の中には規模的に他を圧倒している。円形周溝墓の形態はK-2、K-3号が削平されており、溝部が途切れる箇所が多くブリッジ認定作業は困難なものとなっているが、東山南（A）K-1号の、保存状態はこの内の中では良好であり、東西の2カ所に対置的にブリッジが認められる。遺物は西側ブリッジの北側溝先端より3m付近で、甕（完形）1点が圧し潰された状態で検出される。東ブリッジの南側溝先端に、小型壺1点が溝底より5cm程度浮上して認められる。築造時期は、甕、小型壺の形態から5世紀後半の和泉期に該当する。東山南（A）K-4は、ブリッジを設置しない形態で溝が全周する。方台部は、台形状に近い形態であり、さらに溝外辺の南、北の両コーナーが突出しており方形を成さない。遺物は、3箇所より検出されている。特に南、北部での出土状態は対称的であり、方台部を挟んで埋設している様相を呈する。北側溝では、直刀1点が溝底部に密着して、南側溝では、須恵器（把手付鉢）1点、土師器（高杯）9点、土師器（杯）1点が破壊、投棄され、夥しく重なりあって出土している。出土レベルは溝底に接しており、溝の掘削後、余り時間が経過していない時点、即ち埋葬時の際の祭祀に直刀、須恵器、土師器等が用いられたことを示唆している。⁽¹⁾⁽³⁾東山南（A）Ⅰ群では、K-1、K-4号の2基に認められた出土品の内、土師器に共通したものが認められ時間的に接近したものであることが判断できるが、K-2、K-3号では出土遺物は認められず不明な部分が残るが、規模においては、K-1号よりやや縮小するものの、他のⅡ、Ⅲ群のものよりもK-1号に近く、さらに築造距離の点の上においても、3m以上の距離をおかず築造されていることより、K-1、K-4号に時間的に近く、造墓活動においても計画性が示唆される。

A区Ⅱa群を設ける根拠は少ないが、遺跡中央のY-1号を除くと造構確認範囲内のⅠ群との距離感が存在する。また、K-6、K-7号は規模10~8.72mと縮少し、さらにK-7号では、ブ

リッジを有しない周溝が全周する形態であること、K-6、K-7号が、3m以内の距離に、さらに台地上の平坦地にあることにより、これをまとめた。

A II bは、A II aの北方8mの距離をおいて存在する。斜面上に築造されるため北側半分は削平されすでに消失している。規模は14~10.8mで中型に属する。A III (K-5号)は、距離および規模から分離し独立させた。

B群はA群より100m東方の丘陵先端部に位置する。2基の円形周溝墓は台部直径が30mと25m、溝幅が2mでA群の最大のA区K-1号台部で18m、溝幅1mと比較して規模の差は歴然としている。

配置は、丘陵の最先端の急傾斜面直前にBK-2号が、約3m離れてBK-1号が築造されている。陸橋部は、BK-1号で3カ所、BK-2号で5カ所設置して、A群と様相が異なっている。出土状況は、溝底部近くに祭祀用に用いられた、須恵器、土師器が破壊され放棄されている。

(註4)

築造順では先に記したが、年代決定の決め手となる須恵器が、A・B群出土して、その製作年代は陶邑における中村浩編年第1型式2段階から3段階の範囲におさまる。把手付碗はA・B群共に出土する器種で、口径、高さともにB-1号出土品のものが大きく、付け加えて口縁内側に腹線をもつことより若干の時間差がよみとれ、さらにB-2号から樽形埴輪が検出されて、B群からA群への移行が考えられる。東山南遺跡の墓域内での、占地の面から観てもB区は台地の先端部分に、A区は台地中央よりの北面上に立地する事、規模の面でB地区では直径35~25m、A地区で18~10mと縮小化の現象が認められ、さらに、B区では2基のみが接近して認められたが、B区では合計9基の円(方)形周溝墓が認められることにより、群集化への志向が進行した事実は、新たなる墓域の設定とそれに伴う造墓活動に、これら中小墳墓の被葬者に対する外的圧力が働いた結果の所産と解釈出来そうである。以上の観点よりB群がA群に僅かに先行して築造が開始されたものと考えられるが、四半期内でも、ごく限定された時間内での造墓活動が示唆される。

東山南のすぐ北側の急斜面を下ると、5世紀後半代の馬具を出土して墳丘規模を縮小した茶塚古墳が位置する。ここでは古式馬具のほかに、副葬品に短甲がみられあわせて墳丘規模に縮小化現象が認められることより、畿内勢力の強力な影響下に属することを示唆するものであり、このような茶塚古墳と造墓活動に対して、在地的で弥生以来の墓制を基盤におくものと考えられる本遺跡の存在は古墳築造技術や副葬品での面で対称的である。

このような、東山南遺跡における、円形周溝墓群の性格付けの視点として、地方の大首長と目されている埼玉県稻荷山古墳とその周辺の円形周溝墓群の関係が注目される。ここでは円形周溝墓群の性格付けは、地方での大首長のもとに直接的な影響下で編成された小首長層墓としてとらえており興味深い。

本県例では、遺跡の関連する5世紀後半代の甲府盆地では、先にもふれたように5世紀では甲府盆地内での古墳は拡散する傾向を示しているが、円形周溝墓関係でも、三珠町上野遺跡第2号墳、御坂町姥塚遺跡第4号墳、樽形町六科丘遺跡第1号墳等と広域にわたっており、調査の進展によってはさらに検出例が増加する傾向にある。これまでに検出された4例は、三珠町

上野遺跡を除くと曾根丘陵以外の、いわゆる中期古墳の分布範囲外に立地しており、特に六科丘遺跡1号墳では視界のひらけた独立丘の北東端に位置して、釜無川西岸周辺に5世紀後半に属する古墳が皆無であることより、ひときわ目立つ存在になっている。さらに曾根丘陵に乗る上野遺跡1号での円形周溝墓は、規模や外形、さらに溝内部で検出された土師器の形式、出土状況から、本遺跡との築造時期、埋葬儀礼に伴う祭祀形態が近い点を示唆しているが、上野遺跡1号においても、中期に属する、大塚古墳、伊勢塚古墳等からは大きく距離間が開いており、東山南での茶塚古墳が至近距離に存在する状況とは異なっている。また、これらは墳丘規模および副葬品の比較においても差異が認められ、多くは1基で存在して群集を成さないなど本遺跡との相異点が多い。このような状況は、本県における5世紀後半に関する研究が資料的にもようやく端緒についたばかりであるにもかかわらず、該期における古墳と円形周溝墓との関係は従来の古墳研究に加え、社会構成等にかかる問題提起を加えて、さらにいっとう複雑さをもたらした感がある。^(註6)この点については甲府盆地全域および全国の動向を考慮にいれながら5世紀後半の甲斐国について検討していく予定である。

注1 本遺跡の、古墳時代に関する円（方）形周溝墓群は、石部氏の説くような古式群集墳の概念でとらえる。

注2 西日本を中心とした各地域でも弥生時代以来の伝統的な墓制である方形周溝墓は、前方後円墳をはじめ高塚古墳築造後も依然存続して世帯共同体の家長墓、あるいは農業共同体の経営単位の家長墓に比定されて久しいが、近年では本県においても全国各地の状勢と同様に、金の尾遺跡→一条林遺跡→上の平遺跡→西田遺跡→桜井畠遺跡→東山南遺跡と、弥生時代以来から連続と伝統的墓制が存続しているものと判断できる。東山南遺跡の中には、K-4号のように、祭祀形態等に弥生以来の方形周溝墓のものと異質な面も認められ、古墳としての名称を用いてもさしつかえないものも存在するが、墳丘は削平により消失されるほど小規模であることや、副葬品が僅かな須恵器、鉄製品に限られることより、その内容は全国に分布する古式群集墳例のものを越えるものではない。したがって、ここでは先の伝統墓制の系譜を重視して、円（方）形周溝墓の用語を用いる。本県例の多くは、削平によって現状で観る限りにおいては、方（円）台部は溝外部との高さには差はなく平坦であるが、瓜生堂遺跡例のような低墳丘の存在をイメージしておきたい。

注3 本例に近い溝内出土からの直刀出土例としては、滋賀県狐塚遺跡S X I01号がある。ここで直刀の保存状況は、本例同様に原型をとどめ良好である。

注4 円形周溝墓に方形周溝墓を含む例は、三重県落合古墳群にみられ、その中心的なものは5世紀中葉から6世紀前半にもとめられている。副葬品も僅かな須恵器、鉄製品を伴

うことより東山南遺跡の性格に近いものと判断できる。

注5 確実な、本遺跡での変遷は須恵器觀察から、樽形を出土するB-2号が造墓活動の初期にあたられ、次いで把手付椀の比較から、B-1→A-4号の順と判断できる。A-4とA-1号では同型の小型壺が共に検出されて、その他の土師器からもほぼ同時期と判断される。このことより、変遷過程はB区（B-1号→B-2号）→A区（A-4・A-1号）で表される。

注6 茶塚古墳の評価については墳丘規模が縮小すること、副葬品では短甲、三環鈴、鉢、古式馬具等が検出されており、年代も5世紀後半に求められることより、畿内勢力からの古墳築造の規制の影響を充てた（甲斐茶塚古墳 1989年を参照）。

参考文献

- 石部正志 群集墳の発生と古墳文化の変質『東アジア世界における日本古代史講座』1980年
中村 浩 和泉陶邑窯の研究 柏書房 1981年
東京国立博物館収蔵資料の再検討 「MUSEUM」№431 1987年
須恵器の初源—その様相と生産の系譜 「MUSEUM」№451 1988年
三重県上野市高猿一号墳出土の須恵器について 「MUSEUM」№468 1990年
白井久美子 小規模古墳の一類型について 「古代」第75・76合併号 1983年
渡辺修一 群小区画墓の終焉期 「研究連絡紙」第11・12号千葉県文化財センター 1985年
奈良県橿原考古学研究所 矢部遺跡 「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49集」1985年
埼玉県教育委員会 埼玉1～7号墳 「埼玉古墳群発掘調査報告」第6集 1988年
三重県教育委員会 落合古墳『近畿自動車(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』1990年
小池 寛 聖城区画小考 「京都府埋蔵文化財情報」第38号 1990年
長野県埋蔵文化財センター 飯田市物見塚古墳 1990年
若松良一 造り出し出土の供獻土器について 「調査研究報告3」1990年
滋賀県埋蔵文化財センター 古墳時代中期の方墳から鉄刀が出土・栗東町狐塚遺跡 1991年
小池 寛 低墳丘方形墓小考—用語の概念規定— 『京都府埋蔵文化財論集』第2集 1991年
柳形町教育委員会 六科丘遺跡 1985年
韭崎市教育委員会 坂井南 1988年
山梨県教育委員会 姥塚遺跡・姥塚無名塚 1987年
山梨県教育委員会 東山南(B)遺跡 1991年
山梨県教育委員会 上の平遺跡(第1・2・3次調査) 1991年
第5回三県シンポ 古墳出現期における地域性 1984年
小林広和・里村晃一 甲斐茶塚古墳 1979年
小林広和・里村晃一 上の平遺跡 「日本歴史」384 1980年
小林広和・里村晃一 山梨県上の平遺跡 「日本考古学年報」 1982年

総括

最後に、東山南遺跡の発掘調査の成果をまとめる。東山南（A）遺跡における造構は、曾根丘陵の中央部に位置する東山三角点（標高 340.2 m）のすぐ北側の頂上部分から北斜面上にかけて認められた。造構の確認範囲は、長さ 100 m、幅 100 m の限られた狭い地域であり、この範囲内に周溝墓が密集して築造されている。

検出された造構の総数は弥生終末期に属する方形周溝墓 2 基、古墳時代の 5 世紀後半に属する円形周溝墓 8 基、方形周溝墓 1 基であり、上の平遺跡同様、集落から隔離して築造された単独の墓域であることが判明した。

1 弥生時代 2 基の方形周溝墓は、方台部の規模が 10 m 前後であり、本県に於ける方形周溝墓の中では中規模の部類にはいる。ここでの最大の成果は、本遺跡と上の平遺跡とが空白地域をはさんで確認されたことである。前にも記して繰り返しになるが、この 2 つの遺跡の間は約 170 m 前後の空白部が存在して、さらに本遺跡の乗る地点は、瘦尾根状に発達して周辺より若干高い独立丘上に位置する。しかもその丘の北斜面上の甲府盆地が一望可能な景観の良い地を選定している。時期は弥生終末であり、上の平遺跡の造墓活動の最盛期にあたる。以上の事実からは本遺跡の性格については、上の平遺跡に関連してその集団墓に含まれるのか、あるいは淘汰した結果であるのか、さらには異なる集団の造墓活動の結果であるのか、今後より詳細な検討が必要となろう。遺物では、Y-1 号よりの出土状況は、ブリッジよりの二カ所に認められた。左軸左位溝ブリッジよりでは確認面黒色土中より、壹 1 点が故意に破壊されて 5 ~ 10 cm 大の破片で、右軸右位溝ブリッジよりでは溝底部で台付甕が台脚を破壊され欠損した状態で投棄されていた。このような、ブリッジよりでの遺物の出土例は上の平遺跡においても多く普遍的であり、該期における祭祀行為の一端を示唆するものである。

2 古墳時代での円（方）形周溝墓は削平により周溝部のみが残存するものであるが、周溝部からは祭祀にかかる遺物群が検出された。なかでも K-4 号方形周溝墓では、北側溝から直刀、南溝からは陶邑における中村浩編年第 1 型式 2 段階から 3 段階と判断出来る把手付椀と土師器、高杯、碗等が故意に破壊され、一括投棄されるという内容のものであった。

次に、本遺跡周辺では 4 世紀中葉から 5 世紀後半にかけて、小平沢古墳、銚子塚古墳、大丸山古墳、丸山塚古墳、茶塚古墳と首長墓の系譜につながる墳墓が集中して築造されているが、本遺跡にはほぼ並行しておこなった上の平遺跡の発掘調査により、古墳出現前の墓制が把握され、今回の調査では 5 世紀後半の首長墓の周辺にかかる墳墓が確認されたことになり、古墳時代における重層社会の一端を示す資料として重要な位置を占めるものと考える。

また本遺跡に、時期、性格が近いものでは、近年の調査で、櫛形町・六科丘古墳、三珠町・上野遺跡 2 号等の発見があり、今後このような類例の増加傾向にあり、甲府盆地における発展期古墳社会を考える上においても、東山南遺跡を含めた小規模な墳墓の詳細な検討が必要となろう。

特に今回の報文中では円（方）形周溝墓の用語を用いたが、弥生以来の墓制としては年代の

開き、社会変革等の諸様相を考慮に入れたものでなく、単に便宜的に用いたもので、この点についても全国の動向をふまえながら、解決しなければならない重要な問題であろう。

(小林広和・里村晃一)



東山南遺跡・全体写真



東山南遺跡遠景（上の平遺跡より）



東山南(A)遺跡と上の平遺跡(3年次)



東山南（A）Y-1号方形周溝墓全景



遺物出土狀況（台付壺）



遺物出土狀況（壺）



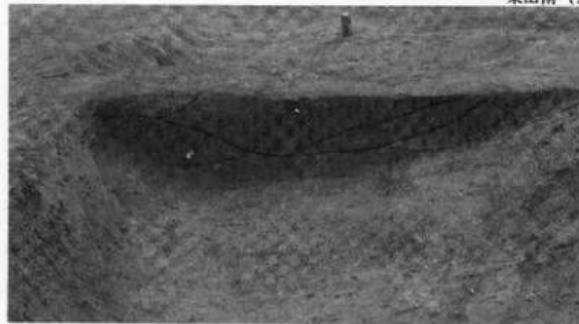
周溝堆積狀況



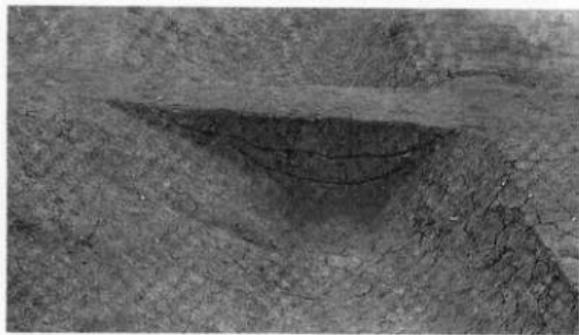
周溝堆積狀況



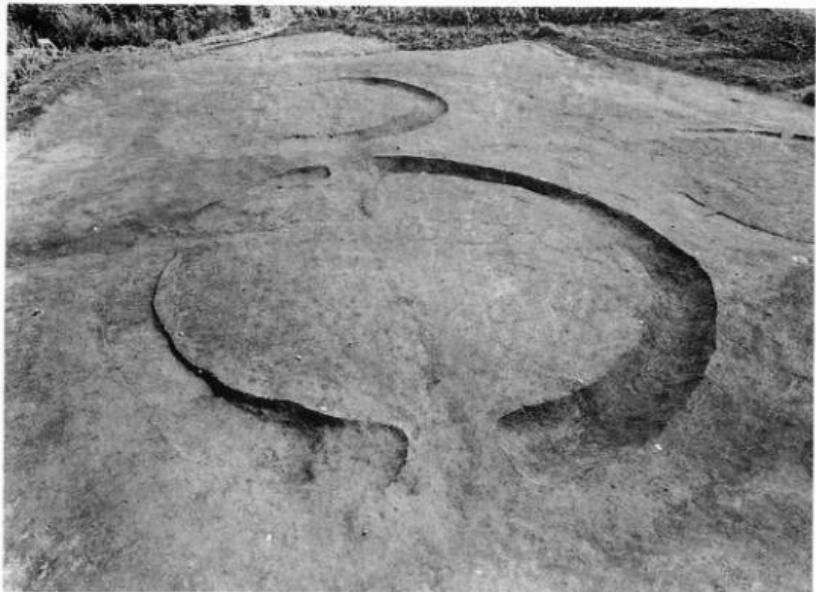
東山南（A）Y-2號方形周溝墓全景



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南（A）K-1号円形周溝墓全景



K-1号円形周溝墓・セクション付



遺物出土狀況（小型壺）



遺物出土狀況（壺）



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南（A）K-2号円形周溝墓



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南（A）K-3号円形周溝墓



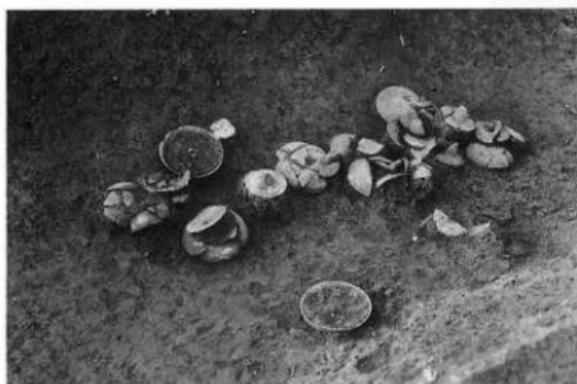
周溝堆積状況



周溝堆積状況



東山南（A）K-4号円形周溝墓全景



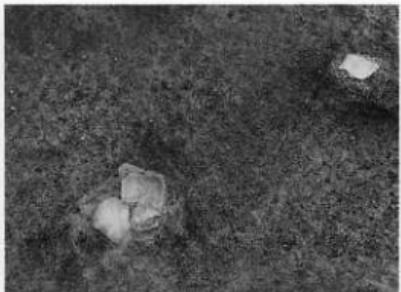
遺物出土状況（南溝・集中区）



遺物出土状況（北溝・直刀）



遺物出土狀況（把手付櫛）



遺物出土狀況（小型壺）



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南（A）K-5号
円形周溝墓全貌



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南 (A) K-6・7号円形周溝墓全景



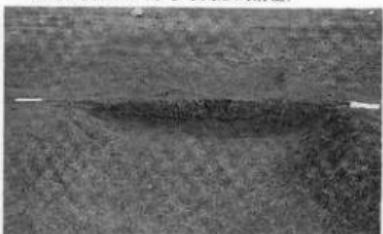
周溝堆積状況 (第6号円形周溝墓)



周溝堆積状況 (第6号円形周溝墓)



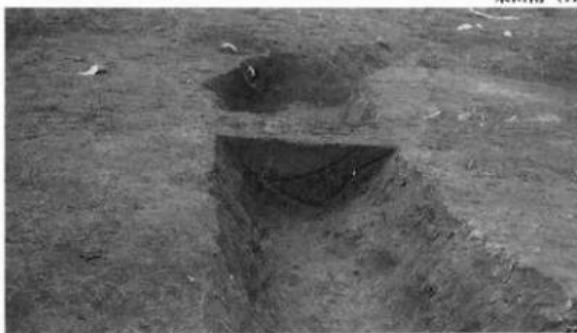
周溝堆積状況 (第7号円形周溝墓)



周溝堆積状況 (第7号円形周溝墓)



東山南 (A) K-8号円形周溝墓全景



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



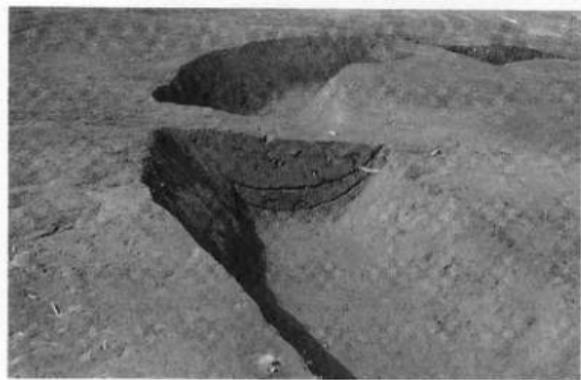
東山南 (A) K-9号凹形周溝墓全景



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



周溝堆積狀況



東山南(A) Y-1号出土



東山南(A) Y-1号出土



東山南(A) K-1号出土

東山南(A) K-1号出土



東山南(A) K-1号出土



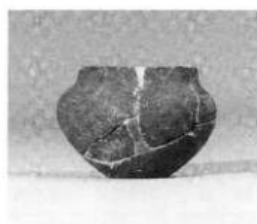
東山南(A) K-1号出土



東山南(A) K-4号南講出土(高杯)



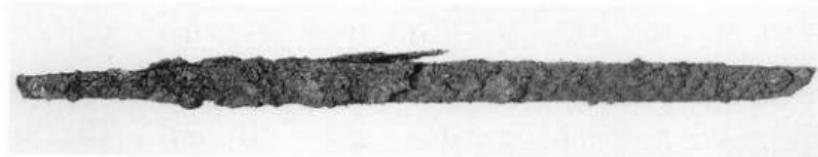
東山南(A) K-4号・南溝出土



東山南(A) K-4号・南溝出土



東山南(A) K-4号・東南コーナー出土



東山南(A) K-4号・北溝出土

報告書概要

フリガナ	ヒガシヤマミナミ(A) イセキ					
書名	東山南(A) 遺跡					
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第76集					
著者名	小林広和 里村晃一					
発行所	山梨県教育委員会					
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター					
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎ 0552-56-3881					
印刷所	(有)新星堂印刷					
印刷日・発行日	1993年3月15日 1993年3月25日					
東山南(A) 遺跡	所在地	東八代郡中道町下向山1271				
	国土地理院 50000分1・甲府	標高	340.1	位置	北緯 35°35'	東経 138°33'
主な時代	弥生終末・古墳時代(5世紀)					
主な遺構	弥生時代一方形周溝墓、古墳時代一方形周溝墓1、円形周溝墓8					
主な遺物	弥生時代終末一台付甕1、壺1、古墳時代須恵器1、土師器14、直刀1、鉢1					
調査期間	1981年5月1日~1981年11月30日					

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第76集

東山南(A)遺跡

印刷日 平成5年3月15日

発行日 平成5年3月25日

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881・3016

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 (有)新星堂印刷

